

共同研究

曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』の

原初形態の復元とその思想史的意義

研究代表者・教授

加来雄之（真宗学）

目次

一、研究成果報告について

二、研究論文

曇鸞の『讚阿弥陀仏偈并論』

加来雄之

三、資料

1 解題

2 『讚阿弥陀仏偈』訓点資料三本対照表

3 『略論安楽土義』訓点資料三本対照表

一、研究成果報告について

二〇二二年度準備研究（共同研究）「曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』の原初形態の復元とその思想的意義」は、曇鸞（四七六？～五四二？）によって撰述された「讚阿弥陀仏偈并論」の原初形態の復元と、曇鸞の〈無量寿経〉に基づく浄土思想を総体的に理解する基盤を提供することを研究目的とした。研究成果の一端として、論文「曇鸞の『讚阿弥陀仏偈并論』と資料」「讚阿弥陀仏偈」訓点資料三本対照表」「略論安楽土義」訓点資料三本対照表」を報告する。

（一）研究論文「曇鸞の『讚阿弥陀仏偈并論』」

従来、曇鸞浄土教の研究は、『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下、『浄土論註』）が中心であった。しかし曇鸞が〈無量寿経〉の浄土思想をどのように受容したかを把握するためには、『浄土論註』のみならず『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを合わせた総合的研究が不可欠である。本論文は、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』がもと『讚阿弥陀仏偈并論』一卷であったという視点の形式について考察する。この課題についてはすでに『大無量寿経』の讃歌と問答―曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』を読む―（二〇二二年）において一部取り上げているが、紙数の関係で考察が不十分であったので再度論じておきたい。曇鸞が『大無量寿経』をどのように受容したかについての思想的な問題については別稿に譲る。

（二）資料「『讚阿弥陀仏偈』訓点資料三本対照表」「略論安楽土義」訓点資料三本対照表」

本研究では、平安、鎌倉、室町時代における曇鸞の原典遺文の訓点資料（未公開資料を含む）の諸本を網羅的に蒐集し総合的に分析し、曇鸞の原典が、日本においてどのように受容され、またどのようにに伝承が形成されていくかの過程を

解明するための準備を行った。この報告では、とくに詳細な訓点を有するものとして、『讚阿弥陀仏偈』については、平安時代の大原来迎院蔵良忍手沢本、室町時代書写と伝えられる大谷大学蔵円空写本模写本、明治時代の南條神興校正七祖聖教所収本の三本を、また『略論安楽土義』については、平安時代の大原来迎院蔵良忍手沢本、室町時代書写本である京都府常楽寺本、南條神興校正七祖聖教所収本の三本を対照した表を提出する（詳しくは、「資料」の解題と凡例を参照のこと）。

資料の作成については、青柳英司、小松肇、藤原智、宮谷啓法の四君の協力を得た。

また常楽寺蔵『略論安楽浄土義』の翻刻については、その奥書から関心をもちながら拝見できずにはいたしたが、この度、常楽寺住職今小路覚真師に各別の配慮をいただくことができました。紙面を借りて感謝の意を表します。

二、研究論文

曇鸞の『讚阿弥陀仏偈并論』

研究代表者・教授 加来雄之（真宗学）

凡例

- 一、漢文を書き下す場合、原則として引用する依拠本の訓点に従ったが、一部、句読点、清濁、送り仮名を補正した。また親鸞の読みなどを参考に変更したものがある。
- 一、出典は次のように略記する。
『真宗聖教全書』↓『真聖全』、『大正新修大藏経』↓『大正蔵』
- 一、記号は以下の意味を示す。
／は、もと改行があることを示す。「」内の文字は、筆者による補記、もしくは推定であることを示す。

問題の所在

曇鸞には、〈無量寿経〉の伝統に立つ三つの著述があるとされる。『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下、『浄土論註』）二巻と『讚阿弥陀仏偈』一巻と『略論安楽（浄）土義』一巻である。曇鸞の浄土教の著述として現存するものはこの三書であり、また伝記によって確認できるものも、この三書以外にはない。この中の『略論安楽土義』については教義的内容から曇鸞の撰述とすることに疑問を呈する研究者もいるが、本論において示す「曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』と「曇鸞の二部作」という二つの視点によってそのいわれなき疑難から救い出すことができると思われる。

この三書を曇鸞の著述と認めるならば、当然、この三書の思想的関係が問題になってこなければならぬと思われる。ところが、この三書の思想的関係を論じた研究はこれまでない。それどころか、この三書をどのように関係づけることによって曇鸞の浄土教思想の全体像を明確にするかという視点さえも確立していないのが今日の現状である。つまり、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との関係については指摘や比較はあっても、その有機的関係に積極的な意味を見出そうとする具体的な思想的考察はまったくない。また『讚阿弥陀仏偈』と『浄土論註』との思想的関係を扱ったものも見当たらない。『略論安楽土義』と『浄土論註』との関係を扱ったものとしては、八木昊恵などの論文があるが、多くは比較的な文献研究にとどまっている。過去の研究においても、近年、発表された曇鸞の浄土教についての諸研究においても『浄土論註』のみで曇鸞の思想を語るという傾向は変わらないのである。

曇鸞の三つの著述の性格

この三書が記された時期や、順序についてはほとんど情報がない。しかしながらおおよそ次のような期間であったと考えられる。まず三蔵法師の菩提流支が『浄土論』を訳したのが、北魏の永安二年（五二九）もしくは普泰元年（五三二）

とされ、また伝記(道宣『続高僧伝』)によれば曇鸞が陶弘景(四五六―五三六)を訪ねて梁の国に入ったのが大通年中(五二三―五二八)であると推測できるので、曇鸞が梁からの帰途、洛陽で菩提流支と值遇し帰浄したのは、菩提流支が『浄土論』を翻訳した直後、五三〇年頃の出来事であることになる。曇鸞が浄土教関係の三書を記したのは、この帰浄後であるから、同じく『続高僧伝』の記述に従って曇鸞が六十七歳まで存命したとすれば十三年間の間に、迦才の『浄土論』の「魏末高齊初猶在」という記述に従って北齊の初め(天保五(五五四)年)まで在世していたとすれば二十数年間の間に、これらの三書を著述したことになる。

三書の執筆次第についても明らかなことは分らないが、後述するように、内容から『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』とが、この順序で一つの著作として執筆されたことはほぼ間違いない。問題は、この二書と『浄土論註』との前後関係であるが、私個人としては曇鸞の著述についてはもともと正確な情報を与えてくれている迦才の『浄土論』の記述にもとづき、曇鸞はまず『浄土論註』によって(無量寿経)の浄土思想を大乘の仏道として基礎づけ、晩年になってともに念仏生活を送った道俗に贈与したのが『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』ではないかと考えている。ただ曇鸞の浄土教思想を理解する上で重要なことは執筆順序ではなく、『浄土論註』と『讚阿弥陀仏偈』・『略論安樂土義』との著述としての性格の差異を明確にしておくことである。曇鸞の著述についてもともと信頼でき、かつ正確な情報を提供する迦才『浄土論』の記述は次のようにこれらの著述の性格をはっきりと区別している。

沙門曇鸞法師は……梁国の天子蕭王、恒に北に向かいて曇鸞菩薩と礼す。天親菩薩の往生論を註解して裁て両卷と成す。法師、無量寿経奉讚七言偈百九十五行并問答一卷を撰集し、世に流行す。道俗等を勧めて往生を決定し諸仏を見ることを得しむ。(沙門曇鸞法師……梁国天子蕭王恒向北礼曇鸞菩薩註解天親菩薩往生論裁成両卷法師撰集無量寿経奉讚七言偈百九十五行并問答一卷流行於世勸道俗等決定往生得見諸仏)

この文は、曇鸞に大きく二種類の著述活動があつたことを示している。つまり「註解天親菩薩往生論裁成両卷」と「撰集無量寿経奉讚七言偈百九十五行并問答一卷」である。前者が世親の『無量寿経優婆提舍願生偈』（以下、『浄土論』）の註解である『浄土論註』を指すことは疑いない。後者の「無量寿経奉讚七言偈百九十五行」が『讚阿弥陀仏偈』を指し「問答一卷」が『略論安樂土義』を指すと理解するか、もしくは「無量寿経奉讚七言偈百九十五行并問答」一卷と理解するか、解釈が分かれるところであるが、私は後者の方が適切であると思う。

つまり『浄土論註』は天親の『浄土論』という特定の著述の註釈書である。その内容は、〈無量寿経〉の仏道が五濁の世・無仏の時を生きる「一切外道凡夫」のための大乘の仏道（易行道）であることを顕彰する思想書である。おそらく『浄土論註』は、当時のさまざまな〈無量寿経〉の仏道に対する疑難に対して、天親の著述を註釈することを通して〈無量寿経〉の仏道が大乘仏道の課題に答えることを証明するために当時の思想界に対して提出されたものである。そのことは、巻頭に龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』をあげて菩薩として阿毘跋致を求め人びとに呼びかけることを明記し、巻尾において「愚かなるかな、後の学者、他力の乗ず可きことを聞きて、当に信心を生ずべし。自ら局分すること勿れ」と「後の学者」に対して信を勧めて結ぶことから窺える。

このように菩薩の論に対する註解である『浄土論註』に対して、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』は、『大無量寿経』にもとづく曇鸞自身の宗教的信念を直接に表明する撰述である。『讚阿弥陀仏偈』のなかで曇鸞はみずから二十回にわたり「我」と表白している。とくに第四十九偈においては「我無始より三界に循りて…中略…我仏恵功德の音を讃ず願わくは十方の有縁に聞かしめ」と阿弥陀仏に帰し安樂国土に生まれることを課題とする機の自覚を表白している。曇鸞が『浄土論註』においては、ただの一度も「我」とみずからを表白することがないことに比較すると、この書がいかにより主体的な書であるかが分かる。『浄土論註』に曇鸞自身の「我」という表白がないことは、『浄土論註』が註釈書であり思想書であることと関係しているのかもしれない。また『略論安樂土義』は六つの主題からなる問答態（ただし第五問

答のなかに三つの問答が収められる)による四二〇〇字余りの小部の著述であり、そのなかで「我」と名のすることはないが、それはこれが問答という文体であることに関係すると思われる。例えば『浄土論』でも「我」という表白が偈頌においては四度出るが、長行には一度も出ないことに類似している。

『讚阿弥陀仏偈』は大部分が『大無量寿経』の願成就文にもとづく讃歌であり、『略論安楽土義』は『大無量寿経』を想定した問答である。しかしながら両者は、単なる『大無量寿経』の祖述ではない。「無量寿経」という名に象徴される宗教的伝統に立った曇鸞の宗教的課題によって構想され、組織化された、きわめて独創的かつ主体的な著述である。

『浄土論註』の二種回向説などのように(無量寿経)を思想的に基礎づけようとする著述ではないが、『大無量寿経』という經典によって実現される宗教的な生き活きと表現している。

私たちは、『浄土論註』において当時の仏教思想界の龍象たる教学者・曇鸞大師に出会い、『讚阿弥陀仏偈并論』において「有縁」の道俗とともに『大無量寿経』の伝統に生きた念仏者であり願生者である曇鸞法師に出遇うであろう。

『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』は、『浄土論註』とは異なり思想的基盤構築のために撰述されたものでもないし、またみずからの宗教的信念の表白のためだけに記されたものでもない。それは曇鸞が共に生きようとした道俗たちの念仏生活の基幹となる書として、さまざまな外道の迷信や自力的修道観や浄土教への疑いが蔓延するなかで浄土信仰を純化するために贈与されたのであろう⁴。思想の混濁するただ中において仏道の歩みを確立するための方法が、称名と讃嘆と問答である。曇鸞は、阿弥陀仏の名号の称念と、阿弥陀仏の功德の讃嘆とによる行儀によって宗教的生活を確立し、問答を与えることによって宗教的思索の指標を示したのである。

『大無量寿経』の讃歌と問答(以下、『讃歌と問答』)で論じたように、古写本や迦才『浄土論』によれば、おそらくは『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とは、もと『讚阿弥陀仏偈并論』という一巻の書であったと推測される。

私は、曇鸞の著述を『讚阿弥陀仏偈并論』『浄土論註』の二部作として理解することによって、曇鸞の(無量寿経)に

基づく浄土教思想、就中、曇鸞における『大無量寿経』の受容を総体的に理解できると考える。

この『讚阿弥陀仏偈』『略論安楽土義』の両書については、後述するように、はやくより「一巻の書」「一部の書」などの指摘があった。さらに私は踏み込んで、両書の原初形態を「一巻」と理解する見解に与したい。つまり題号を『讚阿弥陀仏偈并論』一巻と想定し、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とをそれぞれ讚偈分と論義分として配当し、それらの有機的関係に心を配りながら読むことを提案したい。この『讚阿弥陀仏偈并論』一巻という視点に立つて、『讚阿弥陀仏偈』を讚偈分として、『略論安楽土義』を論義分として、二つの有機的な関係をしていねいに読み解くことによって、曇鸞がどのように『大無量寿経』を受容したかを明確にできるからである。

讚偈は、迦才『浄土論』の記事や、古写本の偈の後に置かれた「百九十五行」「礼五十一拜」という記述によれば、七言を一句とし、二句一行、一九五行から成る偈頌であり、五十一の礼拝すべき主題をもつといえる。主題ごとに「稽首礼」「帰命礼」「我願往生」などと礼拝することから、筆者は『讃歌と問答』において本偈における各偈の末に置かれる礼拝文を五十一として想定し、五十一偈に分けた（資料参照）。内容としては主として『大無量寿経』の願成就経文にもとづいて製作された阿弥陀仏についての讃歌の部分と、龍樹菩薩の讃歌と、およびみずからの表白から構成される。おそらくこのような偈の形態は、本偈のなかで「本師龍樹摩訶薩」と呼び、『浄土論註』のなかで「龍樹菩薩造阿弥陀如来讚中或言稽首礼或言我帰命或言帰命礼」と述べるように、龍樹の造偈の仕事を継承したと考えられる。もとは『略論安楽土義』を併せ一書を形成していたと思われる、その場合は、『讚阿弥陀仏偈并論』の讚偈分と位置づけることができる。『略論安楽土義』が曇鸞の撰かについては疑義も提出されるが、『略論安楽土義』の記事が『讚阿弥陀仏偈』を前提としているのみならず、後述するように、その二つの書の『大無量寿経』理解における有機的な関係からしても『讚阿弥陀仏偈』と同じ著者によるものであることは疑えない。その場合、『讚阿弥陀仏偈并論』の論義分と位置づけられることになる。

『讚阿弥陀仏偈并論』の書誌

ここで『讚阿弥陀仏偈并論』一卷を措定できるテキストについて書誌的な検討をしておきたい。『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを一巻の書として示す現存のテキストは敦煌出土本の二本のみである。この敦煌出土本の二本についてはカラー影印が矢田了章編『略論安楽浄土義』の基礎的研究』（二〇一二年）に収録されている。同書の解題には次のようにある。

(1) 大英博物館蔵スタイン本（卷子）

「オーレル・スタイン（一八六二—一九四三）蒐集敦煌出土の古写本であり、現在、大英博物館に所蔵されている。大正初期に渡英した矢吹慶輝氏が、写真資料として日本に将来したことにより、その存在が明らかとなった。／装丁は卷子本であり、曇鸞の著述である『讚阿弥陀仏偈』に続く形で『略論安楽土義』の全文が書写されている。／当写本は、前半部（『讚阿弥陀仏偈』の箇所）が欠損しており、現存する部分で十紙を数えることができる。この内、九紙が『略論』である。／一紙二十四行、一行二十〜二十一字内外、外題・撰号は欠損しているため不明、内題は「略論安楽土義」、尾題は「讚阿弥陀仏偈并論上巻」、識語には「景雲二年三月十九日弟子帳万及写」とある。景雲二年は唐代の年号であり、西暦七二一年に当たる⁷。

(2) 龍谷大学蔵赤松文庫本（卷子）

「龍谷大学図書館の赤松文庫として所蔵されている古写本である。装丁はスタイン本と同様の卷子本であり、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽浄土義』が途切れることなく書写されている。／スタイン本と同様に、『讚阿弥陀仏偈』

の冒頭より欠損していることから外題を欠き、内題には「略論安樂土義」、尾題には「讚阿弥陀佛并論上卷」とあるが、年紀等を記した識語はない。／約十一紙が現存しているが、その約四枚が『讚阿弥陀仏偈』に当たり、『略論』は七枚を数える。一紙二十八行、一行二十〜二十三字内外の古写本である。／その本文は、スタイン本と異なる点もあるが、全体的にはほぼ一致し、同系統である可能性が高い。ただし、当写本の方が『讚阿弥陀仏偈』の部分を多く有している。／なかには誤写と考える箇所⁸に記号を付し、語順を入れ替えることを指示していると考えられる記号も見受けられる。／当写本については、禿氏祐祥氏は「讚阿弥陀仏偈」の古本」（『龍谷大学論集』三〇二）において「赤松連城勸学の記念図書として昨年我が龍谷大学へ購入することが出来た」と述べ、また書風や紙質などから隋末唐初のもものと推定している（一九三頁参照）。ただ、スタイン本のごとき年紀等の識語がないことから、その詳しい書写年代は明らかとならない。

このように当該書の解説は、敦煌出土の二本を曇鸞撰述の『讚阿弥陀仏偈』と途切れることなく書写された『略論安樂土義』という二つの著述の写本であるという理解を示している。このような記述になったのは従来の二つの独立した著述という見解を重視したためと、『略論安樂土義』は曇鸞の著述ではないという学界の一部の見解に配慮したためであろう。

しかし、私はこのような理解には不十分さを感じる。この記述では、写本の形態として、『讚阿弥陀仏偈』には尾題が置かれていないことになり、また『略論安樂土義』は主題と尾題が齟齬するという結果を招くことになるからである。また管見のかぎりではあるが、矢吹慶輝氏が紹介するスタイン本の他の写本では二つの著述がこのような形式で続けて書写されている例を見ることができない。このような写本としての体裁上の矛盾は、「略論安樂土義」という文を題号ではなく、問答導入句、もしくは問答主題提示句として見ることによって解決するのではないかと思う。解題が指摘する

ようにこの二つの写本はともに前半部分が欠損しているために外題と首題（内題）と撰号を確認することができないが、讃偈が終わった後に「讚有一百九十五行禮有五十一拜竟」と讃礼の数を記し、改行して「略論安樂土義」という一文を置き、さらに改行して現在『略論安樂浄土義』として伝えられる同様の全文を収め、尾題に「讚阿弥陀佛并論上卷」と記している。つまり先入観なしに見れば、この写本は次のように理解すべきなのである。この二つの写本は、讃偈と問答からなっている「讚阿弥陀佛并論 上卷」という著述の後半部分の残存である。

想定される題号

では『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』とが一卷の書であったと推測した場合、どのような題号が想定できるであろうか。『讚歌と問答』において検討したが、紙面の関係で省いた箇所も多く、誤記もあったので再度検討してみたい。現在、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』とが本来一卷であった可能性を指示する題号は以下のものである。

迦才『浄土論』	「無量寿経奉讚七言偈百九十五行并問答一卷」
スタイン本	尾題 「讚阿弥陀仏并論上卷」
赤松本	尾題 「讚阿弥陀仏并論上卷」
良忍手沢本	首題 「□□弥陀仏偈并論」
祐誓寺	内題 「讚阿弥陀仏偈并論」
『安養集』	引文 「讚阿弥陀仏偈并論」

祐誓寺本については、筆者は未見であるが、名畑によれば『略論安樂浄土義』に相当する部分をもっていないという

ことなので、良忍手沢本の『讚阿弥陀仏偈』と同じ形態ということになる。

私は一覧に掲げた題号から「讚阿弥陀仏偈并論」を一巻の題号として想定したいのだが、敦煌出土の二本の尾題に「偈」の一字を欠くことから、題号に「偈」を加えるかどうか問題になるところである。「偈」を入れない場合は、敦煌出土本によって「讚阿弥陀仏并論」として「讚阿弥陀仏と論〔阿弥陀仏〕」という意味に理解することができる。ただ私は、別流した偈が「讚阿弥陀仏偈」と呼ばれているところから「偈」の字を入れて題号を「讚阿弥陀仏偈并論一巻」と想定したいと思う。

ちなみに「讚阿弥陀仏偈」という名称については、道綽の『安樂集』のなかでは「大経讚」などと呼んでいるが、この名称は、この偈讚の内容にもとづいているものであり、『浄土論註』や『略論安樂土義』の名称を明示しないという引用の仕方と照らしても、著述名を示しているとは考えにくい。また迦才の名称も形態についての言及であり、著述名とは考えにくい。そもそも道宣、道綽、迦才がいずれも曇鸞の著述について明確な書名をあげていない。このことから曇鸞自身による題号がもとこの二書に存在したのだろうかという疑問さえも提示されている。

想定される撰号

曇鸞の『浄土論註』における「人に因つて法を重ざるを庶ふが故に某造と云ふ¹⁰」という撰号の理解に従えば、もし撰号が後人によって置かれたとすれば、道綽、迦才、道宣が同じく「法師」という呼称を用いていることから、「曇鸞法師作」であったと思われる。

上述したように『略論安樂土義』については、撰者を曇鸞とすることには、古くから疑義が提出されている。非曇鸞説の有力な基盤を与えるのが、元暉（六一七―六八六）撰の『両卷無量寿経宗要』および撰と伝えられる『遊心安樂道』において、『略論安樂土義』の第九問答を「什公説言」と鳩摩羅什の所説として引用していることである。しかしこの鳩

摩羅什説は『観無量寿経』『浄土論』の訳出が鳩摩羅什以降であることなどから成立しないことが論証されている。ただ岡亮二はほぼ同時代の迦才と元暁に異なる二説が存在していた事実は重要であるとして、『略論安楽土義』の曇鸞撰述説を再検討するべきであると、『浄土論註』と『略論安楽浄土義』との思想的差異などを指摘して、曇鸞以後、『安楽集』以前に誰かによって撰述されたと主張している。ただ私は、元暁にもとづく羅什説が成り立たないことが論理的に明らかである以上、迦才の『浄土論』の記述にもとづき曇鸞撰として受け止めることが穏当であると思う。また岡の『浄土論註』と『略論安楽土義』との思想的差異を示しての非曇鸞撰述説は、これまでの『浄土論註』を曇鸞の原著とする先入観に基づいた視点からの考察であり、曇鸞の二部作という視点が欠如しているところに問題があると思われる。つまり二部作という視点から言えば『浄土論註』と『讚阿弥陀仏偈并論』の論議分の教義についての筆格が相異なるのはむしろ当然なのである。また上述したように、私にとつての重要な論点は、『略論安楽土義』が曇鸞撰かどうかという点よりも、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを一人の人間による著述と認めなければならないという点にある。

原初形態

以上の見解によつて想定される敦煌出土本（スタイン本）の原形は次のような形態であつたと推測することができる。

讚阿弥陀佛并論上巻

曇鸞法師作

南無阿弥陀仏〔釈名無量寿傍経／奉讚亦曰安養〕

現在西方去此界 十万億土安樂土

（…一九三行略…）

如是十方無量佛 咸各至心頭面礼

讚有一百九十五行 礼有五十一拜竟

略論安樂土義

問安樂國於三界何界所攝答曰釋論言如斯淨土

(…中略…)

安樂國時一入正定聚更何所憂

讚阿弥陀佛并論上卷

もちろんスタイン本の書写された七一一年は、曇鸞の寂後よりほぼ一五〇年の年月を経ており、曇鸞の原本の形態をどれほど保持しているかは不明としかいえないが、迦才の記録する形態に合致することから、おそらく両書を一卷とする伝承があつたのであろう。

「一卷」という視点の形成

中国・朝鮮において、両書を一卷としてみる唯一の情報、迦才『浄土論』の記述のみである。しかし迦才の「法師撰集無量寿経奉讚七言偈百九十五行并問答一卷」という記述によって「無量寿」以下を書名とみることは難しい。なぜなら迦才は『浄土論註』についても「沙門曇鸞法師…注解天親菩薩往生論裁両卷」としか述べていないからである。また道宣の『続高僧伝』は著述名において錯誤があるし、曇鸞の浄土思想の継承者と目される道綽の『安樂集』は、書名を示さずに『浄土論註』『讚阿弥陀仏偈』『略論安樂土義』を引用し、『讚阿弥陀仏偈』にあたる偈文を「大経讚」「傍経

大経奉讃」「大経偈」と呼んでいるが、それを書名と見ることは難しく、結果、これらの記述からは『讚阿弥陀仏偈并論』を想定する情報どころか曇鸞の著述の正式の名を窺う情報もない。彼ら以後にも『讚阿弥陀仏偈并論』という著述を示すような記録は目録類を含めても見出せない。

転じて日本に目を向けると、この両書を一卷として書写したテキストは現在のところ発見されていない。ただ後に紹介するように一卷であったことを示唆する書として良忍手沢本をあげることができる。

日本では、曇鸞の著述に言及したのは、元興寺三論宗の智光の『無量寿経論釈』五卷（宝龜年間七七〇～七八〇年）が初めとされている。そこには『浄土論註』の多くと、十二光の解説に『讚阿弥陀仏偈』が依用されているが『略論安楽土義』の引用はない。

禿氏祐祥によれば、平安時代、寛治八（一〇九四）年永超の勘録した『東域伝灯目録』には『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とが羅什の著述として記載されていた。

無量寿経論註述	一卷
同論偈註解	一卷 曇鸞
同論釈	五卷 日本智光
讚歎阿弥陀仏偈	羅什
略論安楽土義	同上

（禿氏祐祥「往生論註解説」¹²）

また源隆国の『安養集』¹³(一〇七〇年頃)には、『浄土論註』が曇鸞撰として引用されている一方、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』が鳩摩羅什作として引用されている。まず『讚阿弥陀仏偈』は『讚阿弥陀偈』云(三三九頁)、『讚阿弥陀仏偈』云(三八六・四四四・五一五頁)、『阿弥陀偈』云(四二八頁)などの名称で引用される。ただ一箇所、『讚阿弥陀仏偈』安楽土義偈『羅什』云(四〇五頁)という特殊な例も見出すことができるが、これは「安楽土義」の四文字を削除し、右に「讚阿弥陀」と訂正すべきところ「安楽土義」の四文字が残ってしまったもの(梯信暁『安養集』四〇五頁)であろう。とくに注目すべきこととして「讚阿弥陀仏偈并論』云(三三七頁)として『讚阿弥陀仏偈』が引用されている。この名称は後述する良忍手沢本『讚阿弥陀仏偈』の首題との関連を見ることができ。つぎに『略論安楽土義』は、『安楽土義』云(九六頁)、『安楽土義』云(二六六・三五二頁)と、やはり鳩摩羅什作として引用されている。このように源隆国の『安養集』やその影響下に作られた良慶の『安養抄』¹⁴などを見ると、天台の伝統では、概ね両書がそれぞれ鳩摩羅什作の別書であるとして扱われていたといえる。

ただ両書が一卷であったことを暗示するテキストがある。それが大原来迎院如来蔵の良忍手沢本として知られる『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』である。奥書によると両書ともに「執筆僧薬源」によって書写移点され、『讚阿弥陀仏偈』は康和元(一〇九九)年十二月一日に書写を、同二日に移点を了え、『略論安楽土義』は翌康和二(一一〇〇)年二月四日に書写を、同六日に移点を了えていることが分かる。この両書は、『讚阿弥陀仏偈』から『略論安楽土義』の次第でほぼ二ヶ月を空けて書写され、良忍(一〇七三—一一三三)の用に供せられたものであることが分かる。良忍や薬源が両書をどのような関係として理解していたかは不明である。ただ『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』を鳩摩羅什作とする『遊心安楽道』も同じく書写されていることから鳩摩羅什作と理解していたのかもしれない。また、この書写と同時期(康和元年(一〇九九—一一三三年の間))と思われる写本に良忍の自筆署名のある迦才『浄土論』(中巻のみ)が大念仏寺に残されている¹⁵。このことから、良忍は曇鸞に「無量寿経奉讚百九十五行并問答一卷」という著述があったことは知っ

ていたと思われる。また良忍とほぼ同時代の珍海（一〇九一一一五二）の『決定往生集』にも迦才の所説として「曇鸞法師注解往生論、撰無量寿讚并問答一卷、勸道俗等決定往生」と述べている。¹⁶とすれば書写された原本が羅什作となっていたのに従っただけかもしれない。

ともかく良忍手沢本の両書は、日本に現存するものとしてはともに最古の写本であり、とくに『讚阿弥陀仏偈』は一九五五行の偈文がほぼ完備しているものとしてきわめて貴重である。ただ巻末に示される「讚一百九十五」の示す一九五行の句数としては三句が不足している。つまり第六偈で二句「遇斯光者業繫除 是故稽首畢竟依」、第九偈で一句「光所至処得法喜」に相当する部分が欠けている。注目したいのは、巻末に示される「礼五十一拜」によって偈文を五十一段に分科する意図を見ることができることである。『讚阿弥陀仏偈』は、外題には良忍の自筆で「讚阿弥陀仏偈 良忍之」とあり、首題には「□□弥陀仏偈并論 羅什法師作」とあるが尾題は置かれていない。また『略論安楽土義』は、外題には「安楽土義 良忍之」とあり、首題、尾題ともに「略論安楽土義」とある。現在、両書は別の巻に書写されているが、『讚阿弥陀仏偈』の首題「讚阿弥陀仏偈并論」が敦煌出土本の尾題「讚阿弥陀仏并論」と類似していること、また偈文の後に尾題が置かれていないことも敦煌出土本と同じであることから、敦煌出土本と同じく、もと一巻であった可能性を窺うことができる。ただし敦煌出土の二本と異なるのは、敦煌出土本の尾題が「讚阿弥陀仏并論」であるのに対して、良忍手沢本の首題は「讚阿弥陀仏偈并論」と「偈」の一字が加わっていることと、良忍手沢本の『略論安楽土義』の尾題が「略論安楽土義」であることである。

このようにして見ると、中国・日本を通して『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを一巻の書として明示した記述は迦才の『浄土論』のみということになる。おそらく迦才以後、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』は別に流布したのである。ただし両書が深い関係にあることは江戸時代の学僧たちによって指摘されていたし、さらに近代に入り、二つの敦煌出土本や良忍手沢本が相次いで紹介されるに至り、両書が一部の書であった可能性が研究者によって指摘さ

れるようになるのである。

『讚阿弥陀仏偈并論』という視点の形成

これまでに両書の関係を指摘した見解を紹介しておこう。廃仏毀釈に立ち向かった明治の浄土宗の僧侶・福田行誠（？～一八八八）は、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との両書の関係について、「されとも共に大經の文義にして。一人の製作なれば。古來は讚と論と合帙して流行せしが。今も合帙の本ま、あり一論讚さして関ることもなければ。近ごろは総て論のみ別行せるなり」〔玄譚并私説〕一八四〇年頃と二書の関係を否定的に述べている。このような見解もあるが、浄土真宗の宗学者においては、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とが深い関係にあるという指摘がはやくからあった。今回、注目したいのは、浄土真宗本願寺派の学僧であり仰誓の門人であった栖浄院誓鎧（一七五三～？）の『略論安楽浄土義讚慧録』二卷（一七九三年、以下、『讚慧録』）である。『讚慧録』は、『略論安楽土義』を玄義分と正積分との二門に分け、さらに玄義分を、一に真偽を判ず、二に造由を挙ぐ、三に大意を明かす、四に流伝を示す、五に注疏を評するの五門に分けて解説している。その中の第二において次のように『略論安楽土義』と『讚阿弥陀仏偈』との関係を指摘している。

第二に造由を挙げるとは、蓋し夫れ勸信誠疑の法門は淨教の鴻基・大經の綱領なり。鸞大師前に大經に傍て一百九十五行の奉讚を作る、「讚阿弥陀仏偈」と名づく是れなり。然るに彼の偈の中、専ら經中の勸信の文を頌して物をして願生の心を生ぜしめて未だ一句の誠疑に亘る者有らず。豈に闕くこと無きことを得んや。故に次いで斯の『論』を撰し、正しく誠疑の文を述して以て人をして惑を仏智不思議に解く者なり。若し夫れ『往生論注』は勸誠兼ねて存す。如実不如実を判ずる等の如きは是れなり。然れば則ち此の論と讚偈と由を鳥翼車輪のごとく一も闕ては則ち不

可なり。迦才、凝然之を讚偈に併せて言を為すは良に由有るかな。当に知るべし。勸誠を具足の為に此の論を造るなり。然を有る人之を知らず、「何の益有りてか『論注』の外に『略論安楽浄土義』を作るや」等と言うは疎昧の甚だしき一に何ぞ此に至る。¹⁸

このように『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との関係を、「勸信誠疑の法門」にもとづいて鳥の両翼や車の両輪のような関係として理解している。つまり『讚阿弥陀仏偈』は勸信の著述であり、『略論安楽土義』は誠疑の著述として、「一も闕いては則ち不可なり」とその密接な関係を指摘している。さらに曇鸞の『浄土論註』が勸信誠疑を兼ね備えている著述である以上、『讚阿弥陀仏偈』のみを曇鸞の著述として、『略論安楽土義』を認めないことは理に合わないとして批判している。誓鑑は一卷の書とまでは述べていないが、敦煌本などが紹介されていないことを考えれば当然であろう。

江戸時代後期の真宗大谷派の学僧であり、鳳霊の養子となつて豊前正行寺を継職した雲華院大舎（二七七三―一八五〇）は、天保十五年に『讚阿弥陀仏偈』を安居で講じており、年代は不詳だがその後には講義したと推測される『略論安楽浄土義講義』において『略論安楽土義』を曇鸞の撰述とする理由を次のように述べている。

故に論註開卷第一義に謹案龍樹菩薩十住毘婆沙等と天親の論を積し乍ら、龍樹を上て其信方便の易行を龍樹より天親御相承あらせられて浄土論を作り玉へば、論註もとより其の心なり、よて鸞師の讚阿弥陀はその源にかえられて龍樹に習ひ、唯大経にのみよて弥陀の仏徳を讚嘆し玉ふ、よてこれを大経讚と称す、その次が略論を作り玉ふ、その所由は其初めに作り玉ふ大経讚に略する所の大経の要義を論ぜん為めの此書撰集なり、其大経讚に略する要義を数番問答して一卷を成し玉ふ略論なり、これを迦才の問答一卷と申さる、は宜なり、爾れば略論と大経讚と一組に

して大経讚に属すべきものなり、¹⁹「此論は大経讚にそへて作り玉ふ」²⁰

大含は、迦才の「并問答一卷」という記述に言及したうえで、両書を「一組」、「略論は」大経讚に属すべきもの「此の論は大経讚にそへて作り玉ふ」と述べて、両書の親密な関係について指摘している。ただ「大経讚に略する所の大経の要義を論ぜん為め」としか位置づけておらず思想的有機的關係には言及していない。これらの点については天保十五年の安居講義『讚阿弥陀仏偈講義』（未翻刻）においても言及していない。

さて『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを曇鸞の著述として合わせて所収したはじめての七祖聖教として南條神興校正『七祖聖教』（十行本）がある。²¹そのことについては南條の師であった大含が『略論安楽土義』を曇鸞の著述と断定したことによるのであろう。

両書の関係という点では、矢吹慶輝「敦煌出土讚阿弥陀仏偈併に略論安楽浄土義に就て」²²に敦煌出土本が紹介されるから状況は大きく進展した。ただし文献的関心を離れ、思想的関心によって両書を考察する研究はわずかりしか現れなかった。

毛利憲明は、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とが合本かあるいは本来一具のものかについて、もと一書であったものが二書として流伝するようになった時代を推測している。また『浄土論註』と『略論安楽土義』との内容を比較して同一人物の筆格であるとしている。²³

これらの研究を承けた八木昊恵は、『略論安楽浄土義』研究崖略」において『略論安楽土義』の概要を『浄土論註』と比較し、思想内容の合致や文体の契同を検討することで曇鸞の撰述であることを論証し、また「第四章『略論』の内容と『讚阿弥陀仏偈』」という項目を掲げ次のように述べている。

「先哲は略論は『讚弥陀偈』に言及せられないものを補足されたものとして種々に論じてある…中略…如上、『略論』を『讚弥陀偈』の補義として見ることは決して不当ではない。『讚弥陀偈』が『大経』のみに止まるのを、今は今日は『大経』の外に『観経』・『無行経』及び『論註』に出名する『業道経』を出し、論は南天〔龍樹〕の『大論』、北天〔世親〕の『浄土論』を双翼両輪として釈成せられ、『讚弥陀偈』と合して安楽浄土論の有機体系を完備するのである。敦煌写本に「讚阿弥陀仏〔偈〕并論」として此の二部を一括してあるのは蓋し一部の書名としての原基的形態を示すものと云へよう。²⁴

八木は、この課題には二頁ほどしか割いていない。そして『略論安楽土義』は「『讚弥陀偈』と合して安楽浄土論の有機体系を完備する」、また敦煌出土本の尾題は「一部の書名としての原基的形態」とまで述べているが、結局は「『略論』を『讚弥陀偈』の補義として見る」という理解にとどまっている。

ついで文献的研究において大きな転機をもたらしたのは、前述の良忍手沢本である『讚阿弥陀仏偈』『略論安楽土義』の二本の古写本の紹介である。藤原凌雪は、この書がもと一部の書であったことを前提に、二書として別に流伝した理由について次のように推測している。

私も、先輩の示唆の如く、曇鸞の原著は、大経によつて浄土の二報を讚じた讚偈と、それによつて明かし得なかつた重要教義に関する要義問題としての略論から成る「讚阿弥陀仏偈並論」なる一部の書であつたが、讚偈の方はやがて礼文廻向等を加えて頌誦用に編曲せられて、日常勤式として浄土教徒に珍重されるに至つたのだと思う。²⁵

藤原は、両書を「一部の書」と呼び、讚偈と略論が別に流布するようになった事情を讚偈が日常勤式のために使用さ

れるようになったからではないかと推測している。ちなみにこの件については毛利憲明によって早くから指摘されていたと付言している。

名畑応順の『略論安楽浄土義講案』は、現在まで『略論安楽土義』についてのもっともまとまった著述である。名畑は敦煌出土本を紹介するなかで「この写本によれば、讚偈と略論とは併せて一部の書であって、別行すべき性質のものではなかったのである」と指摘している²⁶。しかしながら両書の関係について考察するよりは、『略論安楽浄土義』と『浄土論註』との関係に焦点を当てている。

最近では松尾得晃が『略論安楽土義』に限ってではあるが、これまでの先行研究をまとめて次のように述べている。

だからといって、『略論』が『讚阿弥陀仏偈』そのものを略して論じたものではないことに注意しておきたい。あくまで、『讚阿弥陀仏偈』・『略論』は、『無量寿経』所説の阿弥陀仏およびその浄土について著されたものである。一方、『略論』は『無量寿経』に説かれる内容について問答したものであり、『讚阿弥陀仏偈』そのものについて言及したのではない。前書の浄土教思想を論じる場合、両書は、『無量寿経』そのものを対象とした典籍であることを基本的に据えなければならない。

(『略論安楽浄土義』の概要と研究課題)²⁷

松尾は、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との親密な関係と『浄土論註』とは異なった関心で読むことを指示する点で従来の研究成果をよくまとめているが、二つの書の思想的関係についてはほとんど示すところがない。しかしながら、この見解こそが両書のおかれた今日の研究状況をよくあらわしているといえよう。

小 結

以上、『讚阿弥陀仏偈并論』一卷という視点の形成、およびそれにもとづいた曇鸞の二部作という視点の曇鸞の浄土教理解に必要な理由を述べてきた。

『讚阿弥陀仏偈』は『略論安楽浄土義』を想定しており、『略論安楽浄土義』は『讚阿弥陀仏偈』を前提としている。しかし、両書が「一部」「一具」であるという理解は、いまだ曇鸞の『讚阿弥陀仏偈并論』という営みの本質を明らかにするために不十分なのである。『讚阿弥陀仏偈并論』一卷における讚偈分と論義分という理解によってのみ、曇鸞が『大無量寿経』をどのように受容したかを総体的に理解する視点を確立できるのである。与えられた紙数をこえたので曇鸞における『大無量寿経』受容の思想的な意義についての考察は別稿に譲りたい。

註

- 1 迦才『浄土論』下（浄土宗全書）六・六五七（三二）頁。ちなみに『浄土宗全書』は「法師、無量寿経を撰集し、七言偈百九十五行并問答一卷を讀し奉る」と読んでいるようである。
- 2 曇鸞『浄土論註』上（『真聖全』一・二七九頁）。
- 3 曇鸞『浄土論註』下（『真聖全』一・三四八頁）。
- 4 当時の状況に対する曇鸞の受け止めは、『浄土論註』の冒頭における五三の難がよく示している（『真聖全』一・二七九頁）。
- 5 『真聖全』一・三三二頁。
- 6 曇鸞が龍樹の偈、おそらくは『十住毘婆沙論』「易行品」の弥陀讚か、『十二礼』を継承するかたちで偈を形成したという伝承があったのかもしれない。
- 7 矢田了章『略論安楽浄土義』の基礎的研究』四頁。
- 8 矢田『略論安楽浄土義』の基礎的研究』六二頁。

- 9 名畑『講案』三一頁。
- 10 『真聖全』一・二八一頁。
- 11 岡亮二「『略論安楽浄土義』の一考察―曇鸞撰述説をめぐりて―」(『宗学院論集』三八・一九六七年)。
- 12 禿氏祐祥「往生論註解説」(『宗学院論輯』三五、三三頁)。
- 13 梯信暁「宇治大納言源隆國編『安養集』本文と研究」(『百華苑』一九九三年)。
- 14 『安養抄』第二卷(『大正藏』八四・一六五頁上)。
- 15 筆者は未見。工藤暲導「迦才『浄土論』と中国浄土教―凡夫化土往生説の思想形成」(法蔵館、二〇一三年、二八頁)に依る。
- 16 珍海『往生決定集』(『大正藏』八四・一一五頁下)。
- 17 福田行誠『玄譚并私説』(二八四〇年頃、『浄土宗全書続六』七四頁)。
- 18 誓鑑『讚慧録』第七丁ウ、第八丁オ。
- 19 大含『講義』二九八頁。
- 20 大含『講義』二九九頁。
- 21 名畑は、「南條神興が校訂して、明治十二年に、京都の西村九郎右衛門以下六書肆によつて出版せられた、三冊の小型七祖聖教に至つて、始めて略論が編入せられた」(名畑三六頁)としている。
- 22 『宗教界』一三六・一九一七年。『鳴沙餘韻』解説篇所収、一九三三年に再録。
- 23 毛利憲明「略論作者の研究(一)から(五)」(『真宗研究』一四〇一八、一九二八年)および「讚阿弥陀仏偈の原形」(『真宗研究』二九、一九三〇年)。
- 24 八木昊恵「『略論安楽浄土義』研究涯略」二〇七―九頁。
- 25 藤原凌雪「讚阿弥陀仏偈の古写本―來迎院の良忍手沢本に就て―」一九五五年。
- 26 名畑『略論安楽浄土義講案』二九頁。
- 27 松尾得見「『略論安楽浄土義』の概要と研究課題」『略論安楽浄土義』の基礎的研究』二〇一二年、一五五頁。

主要参考文献一覧

- 加来雄之『大無量寿経』の讃歌と問答―曇鸞撰『讃阿弥陀仏偈并論』を読む― 東本願寺、二〇一二年。
名畑應順『略論安楽浄土義講案』 東本願寺、一九六六年。
矢田了章編『略論安楽浄土義』の基礎的研究』 永田文昌堂、二〇一二年。

三、資料

1 解題

準備研究の成果として『讚阿弥陀仏偈』（以下、『讚弥陀偈』）と『略論安楽土義』（以下、『略論』）との訓点資料について「『讚阿弥陀仏偈』訓点資料三本対照表」・「『略論安楽土義』訓点資料三本対照表」を作成した。

この対照表は凡例にも記すが以下のような構成になっている。

『讚弥陀偈』については、

上段 良忍手沢本（良忍本）

中段 円空写本模写本（円空本）

下段 南條校正本（南條本）

『略論』については、

上段 良忍手沢本（良忍本）

中段 常楽寺蔵本（常楽寺本）

下段 南條校正本（南條本）

『讚弥陀偈』および『略論』も、上段は良忍本、下段は南條本となっているのは、この二本については『讚弥陀偈』と『略論』とが同一者によって訓点を施されたテキストであることによる。

良忍本の『讚弥陀偈』は、すでに『大無量寿経』の讃歌と問答（以下、講録）資料篇で紹介したが、『略論』の訓点を含めた翻刻はこれまでなかった。（ちなみに『浄土真宗聖典全書』所収本は良忍本を底本としているが、訓点については採用していない。）南條本『讚弥陀偈』についてはすでに講録資料篇で校異を含めて紹介済みである。『讚弥陀偈』対照表中段の円空本は講録資料篇に掲載済みである。『略論』対照表中段の常楽寺本についてははじめての翻刻である。ただし円空本や常楽寺本が両書の流伝過程においてどのような位置をもつかは今後の課題である。

『讚弥陀偈』および『略論』は北魏から北斉時代に活躍した仏者曇鸞和尚によって造られた。両書は迦才の『浄土論』に「法師撰集無量寿经。奉讚七言偈百九十五行。并問答一卷。流行於世。勸道俗等。決定往生。得見諸佛。」（『大正藏』四七・九七頁）と紹介され、それぞれ『大無量寿経』についての讃偈と問答の著述である。

『讚弥陀偈』は、巻末に置かれる「讚一百九十五 禮五十一拜」（南條本）という指示に随えば、七言一句、二句一行で、全体は一九五行、五十一段の偈頌から構成される。題号および、巻頭の「南無阿彌陀佛（釋名無量壽傍經／奉讚亦曰安養）」（南條本）という仏号・釈名文の示す通り、仏の名号すなわち「南無阿彌陀仏」を根本原理とし、その展開として『無量寿経』に傍えて、阿弥陀仏とその安養国を讃嘆することを内容とする。

構造としては『無量寿経』の文に基づく総讚、衆生世間清浄（阿弥陀仏、聖衆）、器世間清浄（安樂土の地、虚空、水）の讚嘆。それから『無量寿経』に基づかず、曇鸞が讃偈を造る背景として、師徳（龍樹）の讚嘆や自身の懺悔と回向、十方諸仏への帰依をうたう結讚という次第である。

『略論』は、阿弥陀仏の安楽土と、そこに衆生が往生していくことについての主要な問題を問答形式で論ずる散文の書である。構造としては大きく六問答から成り、前二は安楽土の義を論じ、後四は往生の義を論ずる。第一「三界撰不問答」、第二「莊嚴數量問答」、第三「輩品因縁問答」、第四「胎生快樂問答」、第五「仏智疑惑問答」、第六「十念相続問答」という次第である。特に第五問答は胎生往生の原因となる仏智疑惑の所以を『無量寿経』の「不了仏智」等の文に見定め、総じては「仏智」への疑惑を対治するはたらくとして、別して仏の「不思議智」、「不可称智」、「大乘広智」、「無等無倫最上勝智」についてそれぞれ詳しく論じている。

この『讚弥陀偈』と『略論』は今日では別々に流布しているが、『略論』の第二問答には、「讚を尋ねて知るべし、復た重て序べず。」(南條本)と、明かに『讚弥陀偈』を前提した記述がある。また現存最古の敦煌出土スタイン本が『讚弥陀偈』と『略論』を連続して記した後、尾題に「讚阿弥陀佛并論上卷」としていることや、日本最古の写本である良忍本の『讚弥陀偈』の内題に「□□彌陀佛偈并論」とあること等から両書が一具の書であった可能性が指摘されている。講録ではさらに踏み込んで、これらの原初形態は『讚阿弥陀仏偈并論』という一巻の著述であったという視点を提出している。

讚阿弥陀佛偈訓点資料三本

(一) 大原来迎院蔵良忍手沢本

京都大原の来迎院所蔵。日本においては現存する最古の写本である。外題に「讚阿弥陀佛偈 良忍之」、奥書に「康和元年十二月一日申時於大原報身房書寫功畢、同二日移點了 執筆僧藥源、願依此書寫功自他共生極樂國矣」とある。ここから康和元年(一〇九九)執筆僧桑門藥源の手によって書写・移点され、来迎院の創立者である良忍の用に供されたものと知ることができる。

所有者の良忍は延久五年（二〇七三）一月一日、尾州知多郡富田の莊（現愛知県東海市）に生まれた。十二歳で比叡山にて出家、檀那院良賀より天台の教觀を学んだとされる。嘉保二年（二〇九五）、二十三歳の時に大原に隱遁、薬源によって『讚阿弥陀仏偈』が書写されたのはその後二十七歳の時に当たる。そして天仁二年（二一〇九）、大原に来迎院を創立、永久五年（二一一七）に阿弥陀如来の示誨を受けて融通念仏を感得し、以後その勧進に務める。天承二年（二二三二）、六〇歳で大原来迎院にて入寂する。来迎院にある如来蔵に収められてある良忍関係の資料中、良忍の書写本や手沢本は十五点現存している。『法華玄義』や『摩訶止観』など天台研究を志向していたことを示す資料の中で、浄土教系の書物は『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』、そして筆者不明の『遊心安楽道』の三点である。

良忍は大乗円頓戒の戒系として禅仁と觀勢からその戒脈をうけ、薬忍、叡空、嚴賢の三系を輩出している。その中で叡空は法然の師に当たり、このことは法然の弟子親鸞が『讚阿弥陀仏偈』を重用し、また孫弟子に当たる円空が本偈を書写していたことも併せて、日本浄土教の伝統の中で本偈が流伝していた可能性を伺わせる。

本書の装丁は一卷の卷子本であり、野引の四紙よりなる。一紙の行数は二十八行、一行四句、一句は基本七言である。ただし六言あるいは八言の箇所もあり、また第六段に二句、第九段に一句の欠失、第十九段に一句の付加ありと、他の本と異なるところが多い。不完全ではあるが訓点が附され流布本（真宗聖教全書二所収）にあるような礼拝・回向文はない。

巻首には「□□（欠失）彌陀佛偈并論 羅什法師作」とある。これは本書が本来『略論』と一具のものであったことを決定付ける資料として重要である。また源隆国の『安養集』（二〇七〇頃）や永超の『東域伝灯目錄』（二〇九四）に伝えられるように、本書が鳩摩羅什の撰述として流伝していたことを示している。

第十四、十七、四十三、四十九段を除いて、一段ごとに右肩に一から五十一までの番号が振られており、六字名号「南無阿彌陀佛」が第一段に組み入れられていることも特徴的である。

(二) 大谷大学蔵天保十五年深草円空写本模写本

京都大谷大学所蔵。外題は「讚阿彌陀佛偈 深草圓空本」、内題は「讚阿彌陀佛偈一卷」、撰号は「曇鸞法師作」とある。本となる「円空本」の奥書として、「願以書寫力早生彌陀國、一校了、寛元々年後七月廿一日書寫了、釋圓空」と、京都深草にある真宗院の開祖、円空立信が寛元元年（一二四三）にこれを書写したことを示している。また奥書には「深草霞谷眞宗律院開祖立信上人眞本摹寫即了、天保十五年四月廿三日 同所 善福寺住僧良實、甲辰六月廿六日講此偈了日良實學人舉贈之、雲華院大含領受、以爲藏本」とある。すなわち円空の真筆になる写本を、天保十五年（一八四四）、同所善福寺の僧良実が書写した。書写が終えられたのは同年四月十五日に開講された安居で本偈が講じられている最中であり、満講時にその講師であつた大谷派の学僧雲華院大含（一七七三—一八五〇）に贈与されたことになる。

円空は法然滅後二年に当たる建保元年（一二二三）八月十日、大和国（現奈良県天理市）に生まれた。十五歳で法然の弟子西山証空の下で出家、以後二十余年浄土教を学んだとされ、本偈を書写したのはその後半、三十一歳の時に当たる。証空の示寂を転機とし、建長三年（一二五二）、三十九歳で京都深草に真宗院を建立。以降弘安七年（一二八四）の入寂まで専修念仏に励み、研究・講説に務めたとされる。著作に『観経疏記』十卷があり、弟子として顕意道教などがある。本書の装丁は和綴じの十四丁、半葉八行で、一行二句、一句七言で整っている。ただし大きな誤綴があり、あるべき丁の順を一、十四とすると、本書は一、二、七、八、五、六、三、四、九以降という順で綴じられている。訓点が附され、礼拝・回向文はない。

巻頭には迦才の『浄土論』と『浄土五祖伝』・『続高僧伝』で本偈について記述された箇所の抜き書きと、本偈を大きく五科に分けた図が記載されている。内題・撰号・名号・釈名が二箇所があり、撰号と名号の位置など異なりがあるが、前者の末尾には「イ」とあり異本の表記であることを示している。

(三) 南條神興校正『真宗／校本七祖聖教』所収本

明治十二年（一八七九）三月に出版された『真宗校本七祖聖教』三巻の中、上巻所収のもの。この『七祖聖教』については表紙裏に「明治十二年三月發兌／南條神興校正／七祖聖教／京都書林 六書堂藏版」とある。出版以来、昭和八年（一九三三）の昭和校訂本が出るまで真宗教団・学界に普及し、汎く依用された。曇鸞の撰述として『往生論註』に次いで『讚阿弥陀仏偈』、『略論安樂浄土義』が続いて載せられている。校正者の南條神興（二八一四―一八八七）は、『讚阿弥陀仏偈』・『略論安樂浄土義』を安居において講述した大含の弟子である。

題号「讚阿弥陀佛偈」、撰号「曇鸞法師作」とある。全体十六丁、半葉十行、一行二句、一句七言で整っている。訓点が付され、各偈文の前後には流布本と同様に礼拝・回向文があり、偈文の区切りが明確であるが、総計五十段となっている。

『略論安樂土義』訓点資料三本

(一) 大原来迎院蔵良忍手沢本

上述の『讚阿弥陀仏偈』良忍本と共に大原来迎院に蔵されている。外題は「安樂土義 良忍之」、内題・尾題ともに「略論安樂土義」とあり、撰号はない。奥書に「康和二年二月四日未時敬書寫了／同月六日巳時□於大原草菴移點了／柔門藥源／自他法界同利益共生極樂成佛道」とある。すなわち本書は『讚阿弥陀偈』が書写されて翌年、同じく執筆僧薬源によって書写・移点され、良忍が所有したものである。

装丁も偈文と同じく一巻の卷子本で、同様の罫引紙七枚を用い、一紙二十八行、一行二十三字前後である。

(二) 京都常楽寺蔵室町時代写本

京都常楽寺所蔵。室町時代末期の写本とされる。室町時代の写本として知られるのは目下、本書と大阪府菟屋本泉寺

所蔵の実悟書写本との二部のみである。外題は「略論」、内題は「略論安樂浄土義」、撰号は「曇鸞法師作」とある。奥書には「右此一巻者六道衆生之骨目出能三界、麟、麒、教也亦聖人之財自毫也、常樂寺、什物」とある。龍谷大学所蔵の天保九年刊本『略論安樂浄土義 附讐比』に墨書校合されており、その奥書は「大正二年八月二十二日常樂寺所蔵寺傳宗祖眞筆本ヲ以一校了」と、浄土真宗祖親鸞の眞筆として伝えられていたことを示している。

装丁は粘葉綴で十四丁、半葉九行、一行十八字前後。訓点が付され、誤植が多く訂正されている。

(三) 南條神興校正『真宗、校本七祖聖教』所収本

『七祖聖教』については上述の『讚阿弥陀仏偈』の解説を参照されたい。題号「略論安樂浄土義」、撰号「曇鸞法師作」とある。全体十一丁、半葉十行、一行は二十二字前後である。なお漢字、訓点ともに天保九年刊本『略論安樂浄土義 附讐比』のものとはほぼ完全に一致している。

(宮谷啓法)

参考文献

- 『昭和校訂 真宗七祖聖教』可西大秀、上杉慧岳校 昭和八年四月八日 破塵閣書房発行
- 『良忍上人の研究』融通念仏宗教学研究編 昭和五十六年五月十日 百華苑発行
- 『深草派祖円空立信上人』奥村玄祐著 昭和六十一年三月一日 浄土宗西山深草派宗務所発行
- 『古写古本 真宗聖教現存目録』真宗本願寺派宗学院編 昭和五十一年三月十五日 永田文昌堂発行
- 『日本仏教人名辞典』斎藤昭俊、成瀬良徳編 昭和六十一年五月三十日 新人物往来社発行
- 『日本仏家人名辞書』鷺尾順敬著 明治三十六年六月三十日 光融館発行

参考論文

「讚阿弥陀仏偈の古写本―來迎院の良忍手沢本に就て―」藤原凌雪著 『顕真学苑論集』第四十七号所収

「略論に関する一考察―来迎院の良忍手沢本を中心に―」藤原凌雪著 『真宗学』第十三・十四号所収
「『略論安楽浄土義』研究雇略」八木昊恵著 『宗学院論輯』第三十五号所収

2 『讚阿弥陀仏偈』訓点資料三本対照表

凡例

- 一、本表は以下の三本を対照した。
 - 上段……大原来迎院蔵良忍手沢本（康和元年書写。以下、良忍本）
 - 中段……大谷大学蔵深草円空本模写本（天保十五年書写。以下、円空本）
 - 下段……南條神興校正『真宗』校本七祖聖教上（明治十二年発兌）所収（以下、南條本）
- 一、依拠本に使 用する古体、異体等の漢字は原則として通用の正体に改めた。また「己」「巳」「已」の三字については文脈によって適宜補正した。
- 一、フ、ノなどの合字は仮名に改めた。菩薩・声聞・菩提などの略字は通常の表記に改めた。依拠本で漢字の連記を示す記号は「々」に統一した。
- 一、依拠本で汚損等により不明瞭な箇所は「□」で示した。また依拠本にはない文字で便宜上補ったもの及び推定したものは「〔 〕」で示した。
- 一、「讚有百九十五行」（良忍本）という説示から二句一行の偈文として考えられるが、スペースの関係上、一句一行で表し、二句目を一字下げで示した。また良忍本については基本四句一行で整えられており、その改行箇所を「」で示した。
- 一、良忍本については、依拠本では返り点、句切りの記号が点で記されているが、ここでは便宜上それぞれ「一」、「。」で表した。
- 一、偈文の次第番号は良忍本に依った。ただし「〔 〕」で括った次第番号は良忍本にはない。
- 一、良忍本、円空本については南條本と漢字の異なる箇所を網掛けで示した。
- 一、南條本の訓点については『昭和校訂七祖聖教』所収本に依った。

段		一	二	三
良忍本	<p>【外題】 讚阿彌陀佛偈 良忍之</p>	<p>南無阿彌陀佛」 現在西方去此界 十萬億刹安樂土 佛世尊号阿彌陀 我願往生歸命禮」</p>	<p>成佛已來歷十劫 壽命方將無有量 法身光輪遍法界 照世盲冥一故頂禮」</p>	<p>智慧光明不可量 故佛又号無量光 有量諸相蒙光照 是故稽首眞實明」</p>
円空本	<p>【外題】 讚阿彌陀佛偈 深草圓空本</p>	<p>現在西方去此界 十萬億刹安養土 佛世尊号阿彌陀 我願往生歸命禮」</p>	<p>成佛已來歷十劫 壽命方將無有量 法身光輪遍法界 照世盲冥一故頂禮」</p>	<p>智慧光明不可量 故佛又号無量光 有量諸相蒙光照 是故稽首眞實明」</p>
南條本	<p>讚阿彌陀佛偈 曇鸞法師作 南無阿彌陀佛 釋名無量壽傍經 奉讚亦曰安養</p>	<p>現在西方去此界 十萬億刹安樂土 佛世尊号阿彌陀 我願往生歸命禮」</p>	<p>成佛已來歷二十劫 壽命方將無有量 法身光輪遍法界 照世盲冥一故頂禮」</p>	<p>智慧光明不可量 故佛又号無量光 有量諸相蒙光照 是故稽首眞實明」</p>

八	七	六	五	四
<p>道光明朗 色超絶 故佛 又号清淨光 一蒙 光照 罪垢除 皆得 解脱 故頂禮</p>	<p>佛光照耀 最第一 故佛 又号 光艶王 三塗 黒闇蒙 光啓 是 故 頂禮 大應供</p>	<p>清淨 光明滅 有對 故佛 又号 无對光</p>	<p>光雲無礙 如虛空 故佛 又号 无礙光 一切有礙 蒙 光澤 是 故 頂禮 難思議</p>	<p>解脱光輪无 限齊 故佛 又号 无邊光 蒙 光觸 者 離 有 无 是 故 稽首 平等覺</p>
<p>道光明朗 色超絶 故佛 又号清淨光 一蒙 光照 罪垢除 皆得 解脱 故 頂禮</p>	<p>佛光照耀 最 第一 故佛 又号 光艶王 三塗 黒闇蒙 光啓 是 故 頂禮 大應供</p>	<p>清淨 光明滅 有 對 故佛 又号 无對光 遇 斯光 者 業繫除 是 故 稽首 畢竟依</p>	<p>光雲无礙 如 虛空 故佛 又号 无礙光 一切有礙 蒙 光澤 是 故 頂禮 難思議</p>	<p>解脱 光輪无 限齊 故佛 又号 无邊光 蒙 光觸 者 離 有 无 是 故 稽首 平等覺</p>
<p>道光明朗 色超絶 故佛 又號 清淨光 一蒙 光照 罪垢除 皆得 解脱 故 頂禮</p>	<p>佛光照耀 最第一 故佛 又號 光炎王 三塗 黒闇蒙 光啓 是 故 頂禮 大應供</p>	<p>清淨 光明無 有 對 故佛 又號 无對光 遇 斯光 者 業繫除 是 故 稽首 畢竟依</p>	<p>光雲 無礙 如 虛空 故佛 又號 无礙光 一切有礙 蒙 光澤 是 故 頂禮 難思議</p>	<p>解脱 光輪無 限齊 故佛 又號 无邊光 蒙 光觸 者 離 有 无 是 故 稽首 平等覺</p>

<p>九</p> <p>慈光遙^{ハルカニ}被^テ施^ス安樂^ヲ。 故佛^ヲ又号^ル歡喜光^ト。 稽首^シ頂禮^ル大安慰^ヲ。</p>	<p>慈光遐^{ハルカニ}被^{ラシメテ}施^ス安樂^ヲ。 故佛^ヲ又号^ル歡喜光^ト。 光所^ノ至^ル處^ニ得^ル法喜^ヲ。 稽首^{シテ}頂禮^ス大安慰^ニ。</p>	<p>慈光遐^ニ被^{ラシメ}施^ス安樂^ヲ。 故佛^ヲ又號^ス歡喜光^ト。 光所^ノ至^ル處^ニ得^ル法喜^ヲ。 稽首^{シテ}頂禮^ス大安慰^ニ。</p>
<p>十</p> <p>佛光能^ク破^ス無明^ノ闇^ヲ。 故佛^ヲ又号^ル智慧光^ト。 一切^ノ諸佛^{三乘}衆^ニ咸^ク共^ニ讚譽^ヲ故稽首^ニ。 咸^ク共^ニ讚譽^ヲ故稽首^ニ。</p>	<p>佛光能破^ス無明^ノ闇^ヲ。 故佛^ヲ又号^ル智慧光^ト。 一切^ノ諸佛^{三乘}衆^ニ咸^ク共^ニ嘆譽^ヲ故稽首^ス。</p>	<p>佛光能破^ク無明^ノ闇^ヲ。 故佛^ヲ又號^ス智慧光^ト。 一切^ノ諸佛^{三乘}衆^ニ咸^ク共^ニ歡譽^ヲ故稽首^{シテ}。</p>
<p>十一</p> <p>光明^ニ切^ル處^ニ普照^ス。 故佛^ヲ又号^ル不斷光^ト。 聞^ク光^ノ力^ノ故^ニ心^ニ不斷^ニ。 皆得^ル往生^ニ故頂禮^ル。 皆得^ル往生^ニ故頂禮^ル。</p>	<p>光明一切^ノ時^ニ普照^ス。 故佛^ヲ又号^ル不斷光^ト。 聞^ク光^ノ力^ノ故^ニ心^ニ不斷^ニ。 皆得^ル往生^ニ故頂禮^ス。</p>	<p>光明一切^ノ時^ニ普照^ス。 故佛^ヲ又號^ス不斷光^ト。 聞^ク光^ノ力^ノ故^ニ心^ニ不斷^ニ。 皆得^ル往生^ニ故頂禮^{シテ}。</p>
<p>十二</p> <p>其^ノ光除^テ佛^ヲ莫^ク能^ク測^ル。 故佛^ヲ又号^ル難思光^ト。 十方^ノ諸佛^讚往生^ニ稱^ス其^ノ功德^ニ故稽首^ス。 其^ノ光降^レ佛^ニ莫^ク能^ク測^ル。 故佛^ヲ又号^ル難思光^ト。 十方^ノ諸佛^讚往生^ニ稱^ス其^ノ功德^ニ故稽首^ス。</p>	<p>其^ノ光降^レ佛^ニ莫^ク能^ク測^ル。 故佛^ヲ又号^ル難思光^ト。 十方^ノ諸佛^讚往生^ニ稱^ス其^ノ功德^ニ故稽首^ス。</p>	<p>其^ノ光除^テ佛^ヲ莫^ク能^ク測^ル。 故佛^ヲ又號^ス難思光^ト。 十方^ノ諸佛^歎往生^ニ稱^ス其^ノ功德^ニ故稽首^{シテ}。</p>
<p>十三</p> <p>神光離^レ相^ニ不可^ク名^ク。 故佛^ヲ又号^ル無稱光^ト。 因^テ光^ノ來^ル佛^ノ光^ノ赫^ク然^ト。 諸佛^所讚^ム故頂禮^ス。 神光離^レ相^ニ不可^ク名^ク。 故佛^ヲ又号^ル無稱光^ト。 因^テ光^ノ來^ル佛^ノ光^ノ赫^ク然^ト。 諸佛^所讚^ム故頂禮^ス。</p>	<p>神光離^レ相^ニ不可^ク名^ク。 故佛^ヲ又号^ル無稱光^ト。 因^テ光^ノ來^ル佛^ノ光^ノ赫^ク然^ト。 諸佛^所讚^ム故頂禮^ス。</p>	<p>神光離^レ相^ニ不可^ク名^ク。 故佛^ヲ又號^ス無稱光^ト。 因^テ光^ノ來^ル佛^ノ光^ノ赫^ク然^ト。 諸佛^所讚^ム故頂禮^{シテ}。</p>

<p>〔十四〕</p> <p>光明照耀^ル 超^ル日月^ニ。 故佛^ヲ号^ル超^ル日月^光。 釋迦佛讚^{ツルニ} 尚^レ不^レ盡^キ。 故我^ニ稽^ス首^ス 无^レ等^々々。</p>	<p>光明照耀^{シテ} 超^リ 二日月^ニ。 故佛^ヲ号^ル超^ル日月^光。 釋迦佛讚^{シテ} 尚^レ不^レ盡^キ。 故我^ニ稽^ス首^ス 无^レ等^等。</p>	<p>光明照耀^{シテ} 過^リ 二日月^ニ。 故佛^ヲ號^ス 二超^ル日月^光。 釋迦佛歎^{シテ} 尚^レ不^レ盡^キ。 故我^ニ稽^ス首^ス 无^レ等^等。</p>
<p>十五</p> <p>阿彌陀佛^ノ 初會^ノ 衆^ノ。 聲聞菩薩數^ニ 无量^{ナリ}。 神通巧妙^ニ 不^レ能^レ算^{コト}。 是故稽^ス首^ス 廣^ク大^ニ 依^ル。</p>	<p>阿彌陀佛^ノ 初會^ノ 衆^ノ。 聲聞菩薩數^ニ 无量^{ナリ}。 神通巧妙^ニ 不^レ能^レ算^{コト}。 是故稽^ス首^ス 廣^ク大^ニ 依^ル。</p>	<p>阿彌陀佛^ノ 初會^ノ 衆^ノ。 聲聞菩薩數^ニ 无量^{ナリ}。 神通巧妙^ニ 不^レ能^レ算^{コト}。 是故稽^ス首^ス 廣^ク大^ニ 會^ル。</p>
<p>十六</p> <p>安樂^ノ 无量^ノ 摩訶薩^ノ。 咸當^ニ 一^ニ 生^ニ 補^ス 佛處^ニ。 除^ク 其^ノ 本願^ヲ 大弘誓^ヲ。 普欲^ク 度脫^{セムト} 諸^ノ 衆生^ノ。 斯等^ノ 寶林功德^ノ 聚^ル。 一^ニ 心^ニ 合掌^{シテ} 頭^ニ 面^ニ 禮^ル。</p>	<p>安樂^ノ 无量^ノ 摩訶薩^ノ。 咸當^ニ 一^ニ 生^ニ 補^ス 佛處^ニ。 除^ク 其^ノ 本願^ヲ 大弘誓^ヲ。 普欲^ク 度脫^{セムト} 諸^ノ 衆生^ノ。 斯等^ノ 寶林功德^ノ 聚^ル。 一^ニ 心^ニ 合掌^{シテ} 頭^ニ 面^ニ 禮^ス。</p>	<p>安樂^ノ 無量^ノ 摩訶薩^ノ。 咸當^ニ 一^ニ 生^ニ 補^ス 佛處^ニ。 除^ク 其^ノ 本願^ヲ 大弘誓^ヲ。 普欲^ク 度脫^{セムト} 諸^ノ 衆生^ノ。 斯等^ノ 寶林功德^ノ 聚^ル。 一^ニ 心^ニ 合掌^{シテ} 頭^ニ 面^ニ 禮^{シテ}。</p>
<p>〔十七〕</p> <p>安樂國土^ノ 諸^ノ 聲聞^ノ。 背^ク 光^ヲ 一^ニ 尋^ニ 若^シ 流星^ノ。 菩薩^ノ 光輪^ノ 四^ノ 十^ノ 里^ノ。 若^シ 秋^ノ 滿^ル 月^ノ 映^ス 紫^ノ 金^ノ。 集^{メテ} 佛^ヲ 法藏^ヲ 一^ニ 爲^ス 衆^ノ 生^ノ。 故^ニ 我^ニ 頂^ニ 禮^ス 大^ノ 心^ノ 海^ノ。</p>	<p>安樂國土^ノ 諸^ノ 聲聞^ノ。 皆^ク 光^ヲ 一^ニ 尋^ニ 若^シ 流星^ノ。 菩薩^ノ 光輪^ノ 四^ノ 千^ノ 里^ノ。 若^シ 秋^ノ 滿^ル 月^ノ 映^ス 紫^ノ 金^ノ。 集^{メテ} 佛^ヲ 法藏^ヲ 一^ニ 爲^ス 衆^ノ 生^ノ。 故^ニ 我^ニ 頂^ニ 禮^ス 大^ノ 心^ノ 海^ノ。</p>	<p>安樂國土^ノ 諸^ノ 聲聞^ノ。 皆^ク 光^ヲ 一^ニ 尋^ニ 若^シ 流星^ノ。 菩薩^ノ 光輪^ノ 四^ノ 千^ノ 里^ノ。 若^シ 三^ノ 秋^ノ 滿^ル 月^ノ 映^ス 紫^ノ 金^ノ。 集^{メテ} 佛^ヲ 法藏^ヲ 一^ニ 爲^ス 衆^ノ 生^ノ。 故^ニ 我^ニ 頂^ニ 禮^ス 大^ノ 心^ノ 海^ノ。</p>

<p>十九</p> <p>其有^ニ衆生^{シテ}生^ニ安樂^ニ一 悉具^ク三十有二相^一 智慧滿足^{シテ}入^ル深法^ニ一 究暢^{メテ}道要^ヲ無^ク羈礙^ス一 隨^テ根^ノ利鈍^ニ成^ス就^ス忍^一 三忍乃至不可說^{ナリ}一 宿命五通常自在^ニ一 至^ク佛^ノ不^レ更^ニ雜^ニ惡趣^ニ一 除^ク生^テ他方^ノ五濁世^ニ一 示現^{シテ}同^ク如^ク大牟尼^ノ一 或生安樂國成大利^ニ 如是功德無邊量^ニ 是故至心^ニ頭面禮^ス</p>	<p>十八</p> <p>又觀世音大勢至^{ナリ} 於諸聖衆^ニ最第一^{ナリ} 慈光照曜^{シテ}大千界^ニ一 侍^テ佛^ノ左右^ニ顯神通^ヲ 度^{シテ}諸有緣^ヲ不^レ暫^ク息^ス一 如^ク大海^ノ潮^ノ不^レ失時^一 如是大悲大勢力^ニ一 一心稽首^ニ頭面禮^ス</p>
<p>其有^レ衆生^ニ々々^ハ安樂^ニ一 悉具^ク三十有二相^一 智慧滿足^{シテ}入^ル深法^ニ一 究暢^{シテ}道要^ヲ無^ク羈礙^ス一 隨^テ根^ノ利鈍^ニ成^ス就^ス忍^一 三忍乃至不可說^{ナリ}一 宿命五通常自在^ニ一 至^ク佛^ノ不^レ更^ニ雜^ニ惡^ニ趣^ニ一 除^ク生^テ他方^ノ五濁世^ニ一 示現^{シテ}同^ク如^ク大牟尼^ノ一 如是功德無邊量^ニ 是故至心^ニ頭^ニ面^ニ禮^ス</p>	<p>又觀世音大勢至^{ナリ} 於諸^ニ聖衆^ニ最第一^{ナリ} 慈光照曜^{シテ}大千界^ニ一 侍^テ佛^ノ左右^ニ顯神通^ヲ 度^{シテ}諸有緣^ヲ不^レ暫^ク息^ス一 如^ク大海^ノ潮^ノ不^レ失時^一 如^レ是大悲大勢力^ニ一 一心稽首^ニ頭面禮^ス</p>
<p>其有^レ衆生^ニ生^ニ安樂^ニ一 悉具^ク三十有二相^一 智慧滿足^{シテ}入^ル深法^ニ一 究暢^{シテ}道要^ヲ無^ク障礙^ス一 隨^テ根^ノ利鈍^ニ成^ス就^ス忍^一 二忍乃至不可計^{ナリ}一 宿命五通常自在^ニ一 至^ク佛^ノ不^レ更^ニ雜^ニ惡趣^ニ一 除^ク生^テ他方^ノ五濁世^ニ一 亦現^{シテ}同^ク如^ク大牟尼^ノ上^ニ 生^ニ安樂國^ニ成^ス大利^一 是故至心^ニ頭^ニ面^ニ禮^ス</p>	<p>又觀世音大勢至^{ナリ} 於^ニ諸^ニ聖衆^ニ最第一^{ナリ} 慈光照曜^{シテ}大千界^ニ一 侍^テ佛^ノ左右^ニ顯^ニ神儀^ヲ 度^{シテ}諸有緣^ヲ不^レ暫^ク息^ス一 如^ク大海^ノ潮^ノ不^レ失^レ時^一 如^レ是大悲大勢至^ニ一 一心稽首^ニ頭面禮^ス</p>

廿一	廿
<p>安樂佛國 諸菩薩 夫可 宣說 隨 智慧</p>	<p>安樂 菩薩承 佛神 於一食 頃 詣 十方 不可算數 佛世界 恭敬 供養 諸 如來 花香伎樂 從 念 現 寶蓋幢幡 隨意 出 珍奇絕 世 无能 名 散華 供養 殊生寶 化成 華蓋 光 晃耀 香氣普 薰 莫不 周 花蓋 小者 四百里 乃有 遍覆 一佛界 隨其前後 一次 化生 是諸菩薩 僉 欣悅 於虛空 中 奏 天樂 雅 讚 德 頌 揚 佛惠 聽受 經法 供養 已 未食 之前 騰 虛 還 神力自在 不可測 故我頂禮 無上導</p>
<p>安樂佛國 諸菩薩 夫可 宣說 隨 智慧</p>	<p>安樂 菩薩承 佛神 於一食 頃 詣 十方 不可算數 佛世界 恭 敬 供 養 諸 如 來 花香伎樂 從 念 現 寶蓋幢幡 隨 意 出 珍奇絕 世 无 能 絕 散 花 供 養 殊 星 寶 化 成 花 蓋 光 晃 耀 香氣普 薰 莫 不 周 花蓋 少者 四百里 乃有 遍 覆 一 佛 界 隨 其 前 後 一 次 化 去 是 諸 菩 薩 會 欣 悅 於 虛 空 中 奏 天 樂 雅 讚 德 頌 揚 佛 惠 聽 受 經 法 供 養 已 未 食 之 前 騰 虛 還 神 力 自 在 不 可 測 故 我 頂 禮 無 上 導</p>
<p>安樂佛國 諸菩薩 夫可 宣說 隨 智慧</p>	<p>安樂 菩薩承 佛神 於一食 頃 詣 十方 不可算數 佛世界 恭 敬 供 養 諸 如 來 花香伎樂 從 念 現 寶蓋幢幡 隨 意 出 珍奇絕 世 无 能 名 散華 供養 殊異寶 化成 華蓋 光 晃耀 香氣普 薰 莫 不 周 華蓋 小 者 四 百 里 乃 有 遍 覆 一 佛 界 隨 其 前 後 一 次 化 去 是 諸 菩 薩 僉 欣 悅 於 虛 空 中 奏 天 樂 雅 讚 德 頌 揚 佛 惠 聽 受 經 法 供 養 已 未 食 之 前 騰 虛 還 神 力 自 在 不 可 測 故 我 頂 禮 無 上 導</p>

<p>廿二</p> <p>敢^テ能^ハ得^ハ生^ハ安樂國^ニ一 皆悉住^ス於^ニ正定聚^ニ一 邪定不定其國無^ニ</p>	<p>安樂ノ聲聞菩薩衆・ 人天ノ智慧咸洞達^ス一 身相莊嚴无殊異^一 但順^カ他方^ニ故別名^ヲ 顔容端正^ニ無可^レ比^フ 精微妙^ク軀非人天^ニ一 虚無之身無極^ノ體^{ナリ} 是故頂禮^ス平等身^ヲ一</p>	<p>於^テ己^ニ萬物^ニ亡^シ我所^ニ一 淨^キ若^シ蓮華^ノ不^レ受^ケ塵^ヲ 往來進止^シ若^シ汎^ノ舟^一 利安^ク爲^シ務^ヲ捨^テ適莫^一 彼^レ己^ニ猶^モ空^ニ斷^ニ二想^ヲ 燃^レ智慧^ノ炬^ヲ照^ス長夜^一 三明六通皆已足^一 菩薩^ノ萬行貫^ク心眼^一 如是^レ功德^無邊量^一 是故至心^ニ頭面^ニ禮^ス</p>
<p>敢^{スミテ}能^テ得^クレ^ハ生^{コトヲ}安樂國^ニ一 皆悉住^ク於^ニ正定聚^ニ一 邪定不定其國無^ニ</p>	<p>安樂ノ聲聞菩薩衆ト 人天ノ智慧咸洞達^{シテ} 身相^シ莊嚴^{スル}无^シ殊異^一 但順^ニ他方^ニ故別名^ヲ 顔容端正^ニ无^レ可^レ比^フ 精微妙^ク軀^ニ非人天^ニ一 虚無之身无極^ノ體^{ナリ} 是故頂禮^ス平等力^ヲ一</p>	<p>於^テ己^ニ萬物^ニ亡^ス我所^ヲ一 淨^キ若^シ蓮花^ノ不^レ受^ケ塵^ヲ 往來進止^シ若^シ汎^ノ舟^一 利安^ク爲^シ務^ヲ誓^メ適莫^一 彼^レ己^ニ猶^モ空^ニ斷^ニ二想^ヲ 燃^レ智慧^ノ炬^ヲ照^ス長夜^一 三明六通皆已足^一 菩薩^ノ萬行貫^ク心眼^一 如是^レ功德^無邊量^一 是故至心^ニ頭面^ニ禮^ス</p>
<p>敢^テ能^ハ得^ハ生^{スルヲ}一安樂國^ニ一 皆悉住^ス於^ニ正定聚^ニ一 邪定不定其國無^ニ</p>	<p>安樂ノ聲聞菩薩衆 人天ノ智慧咸洞達^{セリ} 身相莊嚴^{スル}无^シ殊異^一 但順^ニ他方^ニ故列^レ名^ヲ 顔容端正^ニ无^レ可^レ比^フ 精微妙^ク軀^ニ非人天^ニ一 虚無之身无極^ノ體^{ナリ} 是故頂禮^ス平等力^ヲ一</p>	<p>於^テ己^ニ萬物^ニ亡^シ我所^ニ一 淨^キ若^シ蓮華^ノ不^レ受^ケ塵^ヲ 往來進止^シ若^シ汎^ノ舟^一 利安^ク爲^シ務^ヲ捨^テ適莫^一 彼^レ己^ニ猶^モ空^ニ斷^ニ二想^ヲ 然^{トモシテ}智慧^ノ炬^ヲ照^ス長夜^一 三明六通皆已足^一 菩薩^ノ萬行貫^ク心眼^一 如是^レ功德^無邊量^一 是故至心^ニ頭面^ニ禮^ス</p>

<p>廿六</p> <p>天人一切有所須 無不稱欲一應念一至。</p>	<p>諸佛咸讚 故頂禮。</p> <p>諸聞阿彌陀德号 信心歡喜慶所聞 乃暨一念至心一者 廻向願生皆得往 唯除五逆謗正法 故我頂禮願往生。</p> <p>安樂菩薩聲聞輩 於此世界無比方 釋迦無礙大辯才 設諸假令示少分 最賤乞人竝帝王 帝王傷比金輪王 如是一展轉至六天 次第相形皆如始 以天色像喻於彼 千萬億倍非其類 皆是法藏願力故 稽首頂禮大心力。</p>	<p>廿四</p> <p>諸佛咸讚 故頂禮。</p> <p>諸聞阿彌陀德号 信心歡喜慶所聞 乃暨一念至心一者 廻向願生皆得往 唯除五逆謗正法 故我頂禮願往生。</p>
<p>天人一切有所須 無不稱欲一應念一至。</p>	<p>諸佛咸讚 故頂禮。</p> <p>諸聞阿彌陀德号 信心歡喜慶所聞 乃暨一念至心一者 廻向願生皆得往 唯除五逆謗正法 故我頂禮願往生。</p> <p>安樂菩薩聲聞輩 於此世界無比方 釋迦無礙大辯才 設諸假令示少分 最賤乞人竝帝王 帝王復比金輪王 如是一展轉至六天 次第相形皆如始 以天色像喻於彼 千萬億倍非其類 皆是法藏願力故 稽首頂禮大心力。</p>	<p>諸佛咸讚 故頂禮。</p> <p>諸聞阿彌陀德号 信心歡喜慶所聞 乃暨一念至心一者 廻向願生皆得往 唯除五逆謗正法 故我頂禮願往生。</p>
<p>天人一切有所須 無不稱欲一應念一至。</p>	<p>諸佛咸讚 故頂禮。</p> <p>諸聞阿彌陀佛号 信心歡喜慶所聞 乃暨一念至心一者 廻向願生皆得往 唯除五逆謗正法 故我頂禮願往生。</p> <p>安樂菩薩聲聞輩 於此世界無比方 釋迦無礙大辯才 設諸假令示少分 最賤乞人竝帝王 帝王復比金輪王 如是一展轉至六天 次第相形皆如始 以天色像喻於彼 千萬億倍非其類 皆是法藏願力為 稽首頂禮大心力。</p>	<p>諸佛咸讚 故頂禮。</p> <p>諸聞阿彌陀佛号 信心歡喜慶所聞 乃暨一念至心一者 廻向願生皆得往 唯除五逆謗正法 故我頂禮願往生。</p>

<p>廿八</p> <p>十方佛土、菩薩衆、 及諸比丘生安樂、 無量無數、不可計。 已生今生當、亦然。 皆曾供養、無量佛。</p>	<p>廿七</p> <p>諸往生者悉具足 清淨、色身、无可比。 神通功德及宮殿 服飾莊嚴如六天。 應器寶鉢自然至。 百味、嘉肴饌、已滿。 見色、聞香、意爲食。 忽然飽足、受適悅。 所味清淨、無所著。 事已、化去、後須現。 宴安快樂、次泥洹。 是故至心、頭面禮。</p>	<p>一寶二寶無量寶。 隨心化造、受用具。 堂宇飲食悉如此。 故我稽首、無稱佛。</p>
<p>十方佛土、菩薩、衆 及諸比丘生安樂、 无量無數不可計 已生今生當、亦然 皆曾供養、无量佛</p>	<p>諸往生者悉具足 清淨、色身、无可比 神通功德及宮殿 服飾莊嚴如六天 應器寶鉢自然至 百味、嘉肴饌、已滿 見色、聞香、意爲食 忽然、飽足、受適悅 所味清淨、無所著 事已、化去、須復現 宴安、快樂、次泥洹 是故、至心、頭面禮</p>	<p>一寶二寶无量寶 隨心化造、受用具 堂宇飲食悉如此 故我稽首、無稱佛</p>
<p>十方佛土、菩薩衆 及諸比丘生安樂 無量無數不可計 已生今生當、亦然 皆曾供養、無量佛</p>	<p>諸往生者悉具足 清淨、色身、无可比 神通功德及宮殿 服飾莊嚴如六天 應器寶鉢自然至 百味嘉肴饌、已滿 見色聞香、意爲食 忽然、飽足、受適悅 所味清淨、無所著 事已、化去、須復現 宴安快樂、次泥洹 是故、至心、頭面禮</p>	<p>一寶二寶無量寶 隨心化造、受用具 堂宇飲食悉如此 故我稽首、無稱佛</p>

卅	廿九	
<p>神力無極、阿彌陀 十方、無量、佛、所、嘆、一。 東方恆沙、諸佛、國、 菩薩無數、悉往、觀、 亦復供養、安樂國、 菩薩聲聞、諸大衆、 聽受、經法、一宣、道化、 自餘、九方、亦如是、 釋迦如來說、偈頌、 無量、功德、一故、頂禮、一。</p>	<p>若開、阿彌陀佛、号、 歡喜、讚仰、心、一歸依、 下至、一、念、一得、大、利、 則爲、具、足、一功、德、寶、 設、滿、大、千、世、界、一火、 亦應、直、過、聞、佛、名、 聞、阿彌陀、一不、復、退、 是、故、至、心、一稽、首、禮、。</p>	<p>攝取、百、千、堅、固、法、 如、是、大、士、悉、往、生、 是、故、頂、禮、阿彌陀、。</p>
<p>神力无極、阿彌陀 十方无量、佛、所、 東方恆沙、諸佛、國、 菩薩無數、悉往、觀、 亦復供養、安樂國、 菩薩聲聞、諸大衆、 聽受、經法、一宣、道化、 自餘、九方、亦如、是、 釋迦如來說、偈頌、 无量、功德、故、頂禮、</p>	<p>若開、阿彌陀佛、号、 歡喜、讚仰、心、歸依、 下至、一、念、一得、大、利、 則爲、具、足、一功、德、寶、 設、滿、大、千、世、界、一火、 亦應、直、過、聞、佛、名、 聞、阿彌陀、一不、復、退、 是、故、至、心、一稽、首、禮、</p>	<p>攝取、百、千、堅、固、法、 如、是、大、士、悉、往、生、 是、故、頂、禮、阿彌陀、</p>
<p>神力無極、阿彌陀、 十方、無量、佛、所、 東方恆沙、諸、佛、國、 菩薩無數、悉、往、觀、 亦復供、養、安樂國、 菩薩聲聞、諸、大衆、 聽、受、經、法、一、宣、道、化、 自餘、九方、亦如、是、 釋迦如來說、偈頌、 無量、功德、一故、頂禮、</p>	<p>若開、阿彌陀、德、號、 歡喜、讚仰、心、歸依、 下至、一、念、一得、大、利、 則爲、具、足、一功、德、寶、 設、滿、大、千、世、界、一火、 亦應、直、過、聞、佛、名、 聞、阿彌陀、一不、復、退、 是、故、至、心、一稽、首、禮、</p>	<p>攝、取、百、千、堅、固、法、 如、是、大、士、悉、往、生、 是、故、頂、禮、阿彌陀、</p>

卅一	卅二
<p>諸來^ノ無量^ノ菩薩衆 爲^レ植^ハ德本^ニ致^ス虔恭^ヲ。 或^ハ奏^{シテ}天樂^ノ歌嘆^ル佛^ヲ。 或^ハ頌^{シテ}佛惠^ヲ照^ス世間^ヲ。 或以^テ天花^ト衣^ト供養^シ。 或^ハ睹^テ淨土^ト興^ス等願^ヲ。 如是^ニ聖衆悉現前^ニ。 蒙^テ八梵聲^ヲ授^{ケル}佛記^ヲ。 一切^ノ菩薩增^ス願行^ヲ。 故^ニ我頂禮^シ婆伽婆^ヲ。</p>	<p>聖主世尊說^フ法^ヲ時^ニ。 大衆雲^ニ集^ス七寶堂^ニ。 聽^テ佛開示^ヲ咸^ク悟入^ス。 歡喜充^テ遍^ニ皆得^テ道^ヲ。 于^レ時四面^ニ起^リ清風^ヲ。 擊^ク動^ス寶樹^ト出^テ妙響^ヲ。 和^ハ韻^シ清徹^ク過^キ糸竹^ト。 踰^テ於^テ金石^ト無^ク倫比^ト。 天花^ト繽紛^ク逐^ク香風^ヲ。 自然^ニ供養^シ常^ク不息^ス。 諸天復^テ持^テ天^ノ香花^ヲ。 百千^ノ伎樂^ヲ用^テ致^ス敬^ヲ。</p>
<p>諸^ノ來^ル無量^ノ菩薩衆 爲^レ植^ハ德本^ニ致^ス虔恭^ヲ。 或^ハ奏^{シテ}天樂^ノ歌嘆^ル佛^ヲ。 或^ハ頌^{シテ}佛惠^ヲ照^ス世間^ヲ。 或以^テ天花^ト衣^ト供養^シ。 或^ハ睹^テ淨土^ト興^ス等願^ヲ。 如是^ニ聖衆悉現前^ニ。 蒙^テ入^リ梵聲^ヲ授^{ケル}佛記^ヲ。 一切^ノ菩薩增^ス願行^ヲ。 故^ニ我頂禮^シ婆伽婆^ヲ。</p>	<p>聖主世尊說^フ法^ヲ時^ニ。 大衆雲^ニ集^ス七寶堂^ニ。 聽^テ佛開示^ヲ咸^ク悟入^ス。 歡喜充^テ遍^ニ皆得^テ道^ヲ。 于^レ時四面^ニ起^リ清風^ヲ。 擊^ク動^ス寶樹^ト出^テ妙響^ヲ。 和^ハ韻^シ清徹^ク過^キ糸竹^ト。 踰^テ於^テ金石^ト無^ク倫比^ト。 天花^ト繽紛^ク逐^ク香風^ヲ。 自然^ニ供養^シ常^ク不息^ス。 諸天復^テ持^テ天^ノ香^ヲ。 百千^ノ伎樂^ヲ用^テ致^ス敬^ヲ。</p>
<p>諸來^ル無量^ノ菩薩衆 爲^レ植^ハ德本^ニ致^ス虔恭^ヲ。 或^ハ奏^{シテ}音樂^ノ歌^ニ歎^ル佛^ヲ。 或^ハ頌^ス佛慧^ヲ照^ス世間^ヲ。 或以^テ天^ノ華衣^ト供養^シ。 或^ハ睹^テ淨土^ト興^ス等願^ヲ。 如是^ニ聖衆悉現前^ニ。 蒙^テ三^ノ八梵聲^ヲ授^{ケル}佛記^ヲ。 一切^ノ菩薩增^ス願行^ヲ。 故^ニ我頂禮^シ婆伽婆^ヲ。</p>	<p>聖主世尊說^フ法^ヲ時^ニ。 大衆雲^ニ集^ス七寶堂^ニ。 聽^テ佛開示^ヲ咸^ク悟入^ス。 歡喜充^テ遍^ニ皆得^テ道^ヲ。 于^レ時四面^ニ起^リ清風^ヲ。 擊^ク動^ス寶樹^ト出^テ妙響^ヲ。 和^ハ韻^シ清徹^ク過^キ糸竹^ト。 踰^テ於^テ金石^ト無^ク倫比^ト。 天花^ト繽紛^ク逐^ク香風^ヲ。 自然^ニ供養^シ常^ク不息^ス。 諸天復^テ持^テ天^ノ華香^ヲ。 百千^ノ伎樂^ヲ用^テ致^ス敬^ヲ。</p>

<p>如^レ是^ニ功^ノ德^ノ三^ノ寶^ノ聚^{ナリ}。 故^レ我^ニ運^テ想^ハ一^ニ禮^ス講^ノ堂^ヲ。」</p>	<p>卅三 妙^ノ土^ノ廣^ク大^ニ超^リ數^ノ限^ニ。 自^ラ然^ノ七^ノ寶^ノ所^ニ合^セ成^ス一^ニ。 佛^ノ本^ノ願^力莊^ノ嚴^ノ起^リ。 稽^ル首^ノ清^ク淨^ク大^ニ攝^ル受^ス。」</p>	<p>卅四 世^ノ界^ノ光^ノ曜^ク妙^ク殊^ク絶^ス。 適^ク悅^ク宴^ク安^ク無^ク四^ノ時^ニ。 自^ラ利^ノ化^力力^ノ圓^ク滿^ス。 歸^ル命^ノ方^ノ便^ク巧^ク莊^ノ嚴^一。」</p>	<p>卅五 寶^ノ地^ノ澄^ク靜^ク平^ク如^ク掌^ノ。 無^ク有^ク山^ノ川^ノ陵^ノ谷^ノ阻^ニ。 若^シ佛^ノ神^力須^レ則^レ見^ル。 稽^ル首^ノ不^レ可^ク思^フ議^ス尊^一。」</p>	<p>卅六 道^ノ樹^ノ高^ク四^ノ百^ノ萬^ノ里^{ナリ}。 周^ノ圍^ノ由^ク旬^ノ有^ク五^ノ十^{ナリ}。 枝^ノ葉^ノ布^ク里^ノ二^ノ十^ノ萬^{ナリ}。 自^ラ然^ノ衆^ノ寶^ノ所^ニ合^セ成^ス。」 月^ノ光^ノ摩^ノ尼^ノ海^ノ輪^ノ寶^ヲ。 衆^ノ寶^ノ之^ノ王^ニ而^{シテ}莊^ノ嚴^ス。」</p>
<p>如^キ是^ノ功^ノ德^ノ三^ノ寶^ノ聚^{ナリ}。 故^レ我^ニ運^テ想^ハ禮^ノ講^ノ堂^一。」</p>	<p>妙^ノ土^ノ廣^ク大^ニ超^リ數^ノ限^ニ。 自^ラ然^ノ七^ノ寶^ノ所^ニ合^セ成^ス。 佛^ノ本^ノ願^力莊^ノ嚴^ノ起^リ。 稽^ル首^ノ清^ク淨^ク大^ニ攝^ル受^ス。」</p>	<p>世^ノ界^ノ光^ノ曜^ク妙^ク殊^ク絶^ス。 適^ク悅^ク宴^ク安^ク無^ク四^ノ時^ニ。 自^ラ利^ノ他^力力^ノ圓^ク滿^ス。 歸^ル命^ノ方^ノ便^ク巧^ク莊^ノ嚴^一。」</p>	<p>寶^ノ地^ノ澄^ク靜^ク平^ク如^ク掌^ノ。 无^ク有^ク山^ノ川^ノ陵^ノ谷^ノ阻^ニ。 若^シ佛^ノ神^力一^ニ須^レ則^レ見^ル。 稽^ル首^ノ不^レ可^ク思^フ議^ス尊^一。」</p>	<p>道^ノ樹^ノ高^ク四^ノ百^ノ萬^ノ里^{ナリ}。 周^ノ圍^ノ由^ク旬^ノ有^ク五^ノ千^{ナリ}。 枝^ノ葉^ノ布^ク里^ノ二^ノ十^ノ萬^{ナリ}。 自^ラ然^ノ衆^ノ寶^ノ所^ニ合^セ成^ス。 月^ノ光^ノ摩^ノ尼^ノ海^ノ輪^ノ寶^ヲ。 衆^ノ寶^ノ之^ノ王^ニ而^{シテ}莊^ノ嚴^ス。」</p>
<p>如^キ是^ノ功^ノ德^ノ三^ノ寶^ノ聚^{ナリ}。 故^レ我^ニ運^テ想^ハ禮^ノ講^ノ堂^一。」</p>	<p>妙^ノ土^ノ廣^ク大^ニ超^リ數^ノ限^ニ。 自^ラ然^ノ七^ノ寶^ノ所^ニ合^セ成^ス。 佛^ノ本^ノ願^力莊^ノ嚴^ノ起^リ。 稽^ル首^ノ清^ク淨^ク大^ニ攝^ル受^ス。」</p>	<p>世^ノ界^ノ光^ノ曜^ク妙^ク殊^ク絶^ス。 適^ク悅^ク宴^ク安^ク無^ク二^ノ四^ノ時^ニ。 自^ラ利^ノ他^力力^ノ圓^ク滿^ス。 歸^ル命^ノ方^ノ便^ク巧^ク莊^ノ嚴^一。」</p>	<p>寶^ノ地^ノ澄^ク靜^ク平^ク如^ク掌^ノ。 無^ク有^ク山^ノ川^ノ陵^ノ谷^ノ阻^ニ。 若^シ佛^ノ神^力須^レ則^レ見^ル。 稽^ル首^ノ不^レ可^ク思^フ議^ス尊^一。」</p>	<p>道^ノ樹^ノ高^ク四^ノ百^ノ萬^ノ里^{ナリ}。 周^ノ圍^ノ由^ク旬^ノ有^ク二^ノ五^ノ十^{ナリ}。 枝^ノ葉^ノ布^ク里^ノ二^ノ十^ノ萬^{ナリ}。 自^ラ然^ノ衆^ノ寶^ノ所^ニ合^セ成^ス。 月^ノ光^ノ摩^ノ尼^ノ海^ノ輪^ノ寶^ヲ。 衆^ノ寶^ノ之^ノ王^ニ而^{シテ}莊^ノ嚴^ス。」</p>

<p>卅九</p> <p>蒙^テ道場樹^ヲ對^{ルニ}六根^ニ乃至成佛^{マテ}根清徹^{ナリ}。」</p> <p>音響柔順無生忍 隨^テ力^ニ淺深^ニ咸得證^ヲ。</p> <p>此樹威德所由來</p>	<p>卅八</p> <p>樹^ノ香樹^ノ色樹^ノ音聲^ノ・樹^ノ觸樹^ノ味及樹^ノ法^ノ六情^ニ遇^フ者得法忍^ヲ。」</p> <p>故我頂禮^シ道場樹^ヲ。</p>	<p>卅七</p> <p>微風吹^テ樹^ヲ出^ス法音^ヲ。」</p> <p>普流^ク十方^ノ諸佛^ノ刹^ニ聞^ク斯^ノ音^ヲ得^ル□□忍^ヲ。」</p> <p>至^{ルマテ}成^{ルニ}佛道^ニ不遭苦^ニ。」</p> <p>神力廣大^{シテ}不可量[。]。</p> <p>稽首^シ頂禮^ス道場樹^ヲ。」</p>	<p>周匝^{シテ}垂^ル間^ニ寶瓔珞^{アリ}百千萬種^ニ色變異^ス。」</p> <p>光焰照曜^{シテ}超^ス千日^ニ無極^ク寶網覆^フ其上^ニ。」</p> <p>一切^ノ莊嚴隨^テ應^ニ現^ス。」</p> <p>稽首^シ頂禮^ス道場樹^ヲ。」</p>
<p>蒙^ク三道場樹^ノ對^{スルニ}六根^ニ乃至成佛^{マテ}根清徹^{ナリ}。」</p> <p>音響柔順無生忍 隨^テ力^ニ淺深^ニ咸^{コト}得^レ證^ヲ。</p> <p>此樹威德所由來</p>	<p>樹^ノ香樹^ノ色樹^ノ音聲^ノ・樹^ノ觸樹^ノ味及樹^ノ法^ノ六情^ニ遇^フ者得法忍^ヲ。」</p> <p>故我頂禮^シ道場樹^ヲ。」</p>	<p>微風吹^{クニ}樹^ヲ出^{シテ}法音^ヲ。」</p> <p>普流^ク十方^ノ諸佛^ノ刹^ニ聞^ク斯^ノ音^ヲ得^ル深法忍^ヲ。」</p> <p>至^{ルマテ}成^{ルニ}佛道^ニ不遭苦^ニ。」</p> <p>神力廣大^{シテ}不可量[。]。</p> <p>稽首^シ頂禮^ス道場樹^ヲ。」</p>	<p>周匝^{シテ}垂^ル間^ニ寶瓔珞^{アリ}百千萬種^ニ色變異^ス。」</p> <p>光焰照曜^{シテ}超^ス千日^ニ無極^ク寶網覆^フ其上^ニ。」</p> <p>一切^ノ莊嚴隨^テ應^ニ現^ス。」</p> <p>稽首^シ頂禮^ス道場樹^ヲ。」</p>
<p>蒙^リ三道場樹^ノ對^{スルニ}六根^ニ乃至成佛^{マテ}根清徹^{ナリ}。」</p> <p>音響柔順無生忍 隨^テ力^ニ淺深^ニ咸^ク得^レ證^ヲ。</p> <p>此樹威德所由來</p>	<p>樹^ノ香樹^ノ色樹^ノ音聲^ノ・樹^ノ觸樹^ノ味及樹^ノ法^ノ六情^ニ遇^フ者得法忍^ヲ。」</p> <p>故我頂禮^シ道場樹^ヲ。」</p>	<p>微風吹^テ樹^ヲ出^ス法音^ヲ。」</p> <p>普流^ク十方^ノ諸佛^ノ刹^ニ聞^ク斯^ノ音^ヲ得^ル深法忍^ヲ。」</p> <p>至^{ルマテ}成^{ルニ}佛道^ニ不遭苦^ニ。」</p> <p>神力廣大^{シテ}不可量[。]。</p> <p>稽首^シ頂禮^ス道場樹^ヲ。」</p>	<p>周匝^{シテ}垂^ル間^ニ寶瓔珞^ハ百千萬種^ニ色變異^ス。」</p> <p>光焰照曜^{スルコトヲ}超^ス千日^ニ無極^ク寶網覆^フ其上^ニ。」</p> <p>一切^ノ莊嚴隨^レ應^レ現^ス。」</p> <p>稽首^シ頂禮^ス道場樹^ヲ。」</p>

冊二	冊一	冊	
<p>清風時吹 寶樹一 出 五音聲一宮商和 微妙ノ雅曲自然成 故我頂禮 清淨勳一</p>	<p>七寶樹林周世界ニ 光耀鮮明ニシテ相映發ス 花菓枝葉更互爲ナリ 稽首本願功德聚一</p>	<p>從世ノ帝王ニ至マテ六天ニ 音樂轉妙有八重 展轉勝ノ千億万倍ナリ 寶樹ノ音麗倍亦然一 復有自然ノ妙伎樂 法音清和ニシテ悦ム心神ヲ 哀婉雅亮ニシテ超テ十方ニ 故我稽首 清淨果一</p>	<p>皆是如來ノ五種ノ力ナリ 神力本願ト及満足シテ 明了堅固ノ究竟願一 慈悲方便不可稱ノ 歸命稽首眞無量一</p>
<p>清風時々吹 寶樹一 出 五音聲一宮商和 微妙ノ雅曲自然成 故我頂禮 清淨勳一</p>	<p>七寶樹林周世界ニ 光耀鮮明ニシテ相映發ス 花菓枝葉更互爲ナリ 稽首本願功德聚一</p>	<p>從世ノ帝王ニ至マテ六天ニ 音樂轉妙有八重 展轉勝ノ千億万倍ナリ 寶樹ノ音麗倍亦然一 復有自然ノ妙伎樂 法音清和ニシテ悦ム心神ヲ 哀嫁雅亮ニシテ超テ十方ニ 故我稽首 清淨樂一</p>	<p>皆是如來五種ノ力ト 神力本願ト及満足ト 明了堅固ノ究竟願トナリ 慈悲方便不可稱トス 歸命稽首眞無量一</p>
<p>清風時時吹 寶樹一 出 二五音聲一宮商和 微妙ノ雅曲自然成 故我頂禮 清淨薰一</p>	<p>七寶樹林周ニ世界ニ 光耀鮮明ニシテ相映發ス 華果枝葉更互爲 稽首本願功德聚一</p>	<p>從世ノ帝王ニ至マテ六天ニ 音樂轉妙有八重 展轉勝ノ前億萬倍 寶樹ノ音麗倍亦然ナリ 復有自然ノ妙伎樂一 法音清和ニシテ悦ム心神ヲ 哀婉雅亮ニシテ超テ十方ニ 故我稽首 清淨樂一</p>	<p>皆是如來ノ五種ノ力ナリ 神力本願ト及満足ト 明了堅固ノ究竟願ト 慈悲方便不可稱トス 歸命稽首眞無量一</p>

冊四	〔冊三〕
<p>衆寶ノ蓮華盈テ世界ニ 一々花ノ百千億葉ナリ 其葉ノ光明色ノ无量ニシテ 朱紫紅綠間ノ五色ヲ</p>	<p>其土廣大ニシテ无崖際。シカイ 衆寶ノ羅網遍覆ク上ニ 金縷ノ珠璣奇異ノ珍ト 不可名寶ヲ爲ス校飾ト 周匝ノ四面ニ垂ル寶鈴ト 調風吹動ノ出妙法ト 和雅ノ德香常流布ト 聞者ノ塵勞ヲ習不レ起ラ 此風觸レ身ヲ受テ快樂ト 如比丘ノ得テ滅盡定ト 風吹テ散華ヲ滿佛土ト 隨色ニ次第一ニ不雜亂ト 花質柔軟烈ニ芬芳ナリ 足履ル其上ニ下四指ト 隨舉テ足一時還テ如故ト 用訖テ地開没テ無遺ト 隨其時節ニ花六反ト 不思議報故頂禮ナル</p>
<p>衆寶ノ蓮花盈テ世界ニ 一々花ノ百千億葉ナリ 其葉ノ光明色ノ无量ニシテ 朱紫紅綠間ノ五色ヲ</p>	<p>其土廣大ニシテ无崖際。シカイ 衆寶ノ羅網遍覆ク上ニ 金縷ノ珠璣奇異ノ珍ト 不可名寶ヲ爲ス校飾ト 周匝ノ四面ニ垂ル寶鈴ト 調風吹動ノ出妙法ト 和雅ノ德香常流布ト 聞者ノ塵勞ヲ習不レ起ラ 此風觸レ身ヲ受テ快樂ト 如比丘ノ得テ滅盡定ト 風吹テ散華ヲ滿佛土ト 隨色ニ次第一ニ不雜亂ト 花質柔軟烈ニ芬芳ナリ 足履ル其上ニ下四指ト 隨舉レテ足一時還テ如故ト 用訖テ地開没テ無遺ト 隨其時節ニ花六反ト 不可誼報故頂禮ス</p>
<p>衆寶ノ蓮華盈テ世界ニ 一々華ノ百千億葉ナリ 其華ノ光明色ノ无量ニシテ 朱紫紅綠間ノ五色ニ</p>	<p>其土廣大ニシテ无崖際。シカイ 衆寶ノ羅網遍覆ク上ニ 金縷ノ珠璣奇異ノ珍ト 不可名寶ヲ爲ス校飾ト 周匝ノ四面ニ垂ル寶鈴ト 調風吹動ノ出妙法ト 和雅ノ德香常流布ト 聞者ノ塵勞ヲ習不レ起ラ 此風觸レ身ヲ受テ快樂ト 如比丘ノ得テ滅盡定ト 風吹テ散華ヲ滿佛土ト 隨ニ色ニ次第一ニ不雜亂ト 華質柔軟烈ニ芬芳ト 足履ル其上ニ下四指ト 隨ニ舉レテ足一時還テ如故ト 用訖テ地開没テ無遺ト 隨ニ其時節ニ華六反ト 不可議報故頂禮シス</p>

冊五	冊六
<p>焯燁煥爛^{シテカ、ヤカス} 曜^ル 日光^ヲ。 是故一心稽首禮^ル。」</p> <p>一々花^ノ中^ニ所^レ出^ル光^ヲ。 三十六百有千億^{ナリ}。 一々光^ノ中^ニ有^ル佛身^ヲ。 多少亦如所出光^ノ。」 佛身相好如金山^ノ。 一々又放百千光^ヲ。 普爲十方說妙法^ヲ。 各安衆生於佛道^ニ。」 如是神力無邊量^ノ。 故我歸命阿彌陀^ヲ。」</p>	<p>樓閣殿堂非工造^ニ。 七寶彫綺化所成^{ナリ}。」 明月珠璫交露縵^{シテ}・ 各有浴池形相稱^{ヘリ}。 八功德水滿池中^ニ・ 色味香潔如甘露^ノ。」 黃金池者自銀沙^ニ・ 七寶池沙互如此^ノ。 池岸香樹垂布上^ニ。」</p>
<p>④焯燁煥爛^{キヨウクワラムトシテ} 曜^ス 日光^ニ。 是故一心稽首禮^ス。」</p> <p>一一花^ノ中^ニ所^レ出^ル光^ヲ。 三十六百有千億^{ナリ}。 一一光^ノ中^ニ有^ル佛身^ヲ。 多少亦如所出光^ノ。」 佛身相好如金山^ノ。 一一又放百千光^ヲ。 普爲十方說妙法^ヲ。 各安衆生於佛道^ニ。」 如是神力無邊量^ノ。 故我歸命阿彌陀^ヲ。」</p>	<p>樓閣殿堂非工造^ス・ 七寶彫綺化所成^{ナリ}。」 ④明月珠璫交露縵^{シテ}・ 各有浴池形相稱^{ヘリ}。 八功德水滿其中^ニ・ 色味香潔如甘露^ノ。 黃金池者白銀沙^ニ・ 七寶池沙互如此^ノ。 池岸香樹垂布上^ニ。」</p>
<p>焯燁煥爛^{ウウ} 曜^ク 日光^ト。 是故一心稽首禮^{シテ}。」</p> <p>一一華^ノ中^ニ所^レ出^ル光^ヲ。 三十六百有千億^{ナリ}。 一一光^ノ中^ニ有^ル佛身^ヲ。 多少亦如所出光^ノ。」 佛身相好如金山^ノ。 一一又放百千光^ヲ。 普爲十方說妙法^ヲ。 各安衆生於佛道^ニ。」 如是神力無邊量^ノ。 故我歸命阿彌陀^ヲ。」</p>	<p>樓閣殿堂非工造^ニ・ 七寶彫綺化所成^{ナリ}・ 明月珠璫交露縵^ヲ・ 各有浴池形相稱^{ヘリ}・ 八功德水滿池中^ニ・ 色味香潔如甘露^ノ・ 黃金池者白銀沙^ニ・ 七寶池沙互如此^ノ・ 池岸香樹垂布上^ニ。」</p>

卅七

<p> 梅檀芬馥^{シテ}常流^{ニス}聲^ヲ。 天花彩璨^{サニテ}爲^{セリ}映飾^{スルコトヲ}。 水上^{シノ}熠燿^シ若^シ景雲^ノ。 無漏^ノ依果難^ニ思議^ス。 是^レ故稽首^ニ功德藏^ヲ。 </p>	<p> 菩薩聲聞入^テ寶池^ニ。 隨意淺深如^シ所欲^ス。 若須^{ヘキニハ}灌身^ニ自然^ニ注^ス。 欲^{レハ}令^ム旋復^ニ水尋^チ還^ル。 調和冷暖^ニ無不^{コト}稱^ス。 神開體悅^{シテ}蕩^ス心垢^ヲ。 清明澄潔^ニ若無^キ形^ノ。 寶沙映徹^{シテ}如不^レ深^ク。 澹淡廻轉^{シテ}相注^シ灌^ス。 綽約容豫^{ニシテ}和^ス人神^ヲ。 微波無量^ニ出^ス妙響^ヲ。 隨^テ其所應^ニ一聞^ク法語^ヲ。 或聞^キ三寶^ノ之妙章^ヲ。 或聞^キ寂靜^ニ空无^我。 或聞^ク無量^ノ波羅蜜^ヲ。 力不^レ共^ニ法^ヲ諸^ヲ通慧^ヲ。 </p>
<p> 梅檀芬馥^{シテ}常流^{ニス}聲^ヲ。 天花^{④⑤}彩際^{④⑥}爲^{セリ}映飾^{スルコトヲ}。 水上^{④⑦}熠燿^シ若^シ景雲^ノ。 無漏^ノ依果難^ニ思議^ス。 是^レ故稽首^ニ功德藏^ヲ。 </p>	<p> 菩薩聲聞入^テ寶池^ニ。 隨^テ意^ニ淺深^ニ如^シ所^レ欲^ス。 善須^{ヨク}令^ム灌^ス身^ニ自然^ニ注^ス。 欲^{レハ}令^ム旋復^ニ水尋^チ還^ル。 調^ト和^{ラカニ}冷^{ラカニ}暖^{ナム}無^レ不^{コト}稱^ス。 神^シ開^シ體^ヲ悅^{サセ}蕩^ス心^ノ垢^ヲ。 清^{セイ}明^{メイ}澄^{テイ}潔^{ケツ}若無^キ形^ノ。 寶沙映徹^{シテ}如不^レ深^ク。 澹淡^{④⑧}廻轉^{④⑨}相注^{④⑩}灌^{④⑪}。 綽約容豫^{④⑫}和^{④⑬}人神^{④⑭}。 微^{④⑮}波^{④⑯}無量^{④⑰}出^{④⑱}妙響^{④⑲}。 隨^テ其所應^ニ一聞^ク法語^ヲ。 或聞^キ三寶^ノ之妙章^ヲ。 或聞^キ寂靜^ニ空无^我。 或聞^ク無量^ノ波羅蜜^ヲ。 力不^レ共^ニ法^ヲ隨^テ通慧^ヲ。 </p>
<p> 梅檀芬馥^{トシテ}常流^{ニス}聲^ヲ。 天華^{トシテ}璀璨^{トシテ}爲^{セリ}映飾^{スルコトヲ}。 水上^{トシテ}熠燿^シ若^シ景雲^ノ。 無漏^ノ依果難^ニ思議^ス。 是^レ故稽首^ニ功德藏^ヲ。 </p>	<p> 菩薩聲聞入^テ寶池^ニ。 隨^テ意^ニ淺深^ニ如^シ所^レ欲^ス。 若須^{ヘキニハ}灌身^ニ自然^ニ注^ス。 欲^{レハ}令^ム旋復^ニ水尋^チ還^ル。 調和冷暖^ニ無不^{コト}稱^ス。 神開體悅^{シテ}蕩^ス心^ノ垢^ヲ。 清明澄潔^ニ若無^キ形^ノ。 寶沙映徹^{シテ}如不^レ深^ク。 澹淡^ク廻轉^ク相注^ク灌^ス。 綽約容豫^ク和^ス人神^ヲ。 微波無量^ニ出^ス妙響^ヲ。 隨^テ其所應^ニ一聞^ク法語^ヲ。 或聞^キ三寶^ノ之妙章^ヲ。 或聞^キ寂靜^ニ空无^我。 或聞^ク無量^ノ波羅蜜^ヲ。 力不^レ共^ニ法^ヲ諸^ヲ通慧^ヲ。 </p>

冊八			
	<p>大師龍樹摩訶薩 <small>シテ</small> 誕<small>マ</small> 形<small>ノ</small> 像<small>ノ</small> 始<small>ニ</small> 一<small>ニ</small> 理<small>ヲ</small> 類<small>マ</small> <small>オサメタマヘリツイマ</small></p> <p>關閉邪扇一開正徹。 <small>クク</small> 是<small>レ</small> 閻浮提一切眼。 <small>コナリ</small> 伏承尊悟歡喜地。 <small>シテ</small> 歸阿彌陀一生安樂。 <small>シテ</small> 譬如龍動雲必隨。 <small>ハ</small> 閻浮檀放百卉舒。 <small>フ</small> 南無慈悲龍樹尊 <small>ニ</small> 至心歸命頭面禮。</p>	<p>大師龍樹摩訶薩 <small>シテ</small> 誕<small>マ</small> 形<small>ノ</small> 像<small>ノ</small> 始<small>テ</small> 一<small>ニ</small> 理<small>ヲ</small> 類<small>シタウ</small> 網<small>ラ</small> <small>コナリ</small></p> <p>關閉邪扇一開正徹。 <small>クク</small> 是<small>レ</small> 閻浮提一切眼。 <small>コナリ</small> 伏承尊悟歡喜地。 <small>シテ</small> 歸阿彌陀一生安樂。 <small>シテ</small> 譬如龍動雲必隨。 <small>ハ</small> 閻浮檀放百卉舒。 <small>フ</small> 南無慈悲龍樹尊 <small>ニ</small> 至心歸命頭面禮。</p>	<p>本師龍樹摩訶薩 <small>シテ</small> 誕<small>マ</small> 形<small>ノ</small> 像<small>ノ</small> 始<small>ニ</small> 一<small>ニ</small> 理<small>ス</small> 類<small>シタウ</small> 網<small>ラ</small> <small>コナリ</small></p> <p>關閉邪扇一開正徹。 <small>クク</small> 是<small>レ</small> 閻浮提一切眼。 <small>コナリ</small> 伏承尊悟歡喜地。 <small>シテ</small> 歸阿彌陀一生安樂。 <small>シテ</small> 譬如龍動雲必隨。 <small>ハ</small> 閻浮檀放百卉舒。 <small>フ</small> 南無慈悲龍樹尊 <small>ニ</small> 至心歸命頭面禮。</p>
<p>或聞無作無生忍 <small>ハ</small> 乃至甘露灌頂法。 <small>ス</small> 隨根性欲皆歡喜 <small>ニ</small> 順三寶相眞實義 <small>ニ</small> 菩薩聲聞所行道 <small>ニ</small> 於是一切悉具聞 <small>ク</small> 三塗苦難名永閉 <small>テ</small> 但有自然快樂音 <small>ノ</small> 是故其國號安樂 <small>ト</small> 頭面頂禮無極尊</p>	<p>或聞无作无生忍 <small>ハ</small> 乃至甘露灌頂法 <small>ス</small> 隨根性欲皆歡喜 <small>ニ</small> 順三寶相眞實義 <small>ニ</small> 菩薩聲聞所行道 <small>ニ</small> 於是一切悉具聞 <small>ク</small> 三塗苦難名永閉 <small>テ</small> 但有自然快樂音 <small>ノ</small> 是故其國號安樂 <small>ト</small> 頭面頂禮无極尊</p>	<p>或聞無作無生忍 <small>ハ</small> 乃至甘露灌頂法 <small>ス</small> 隨根性欲皆歡喜 <small>ニ</small> 順三寶相眞實義 <small>ニ</small> 菩薩聲聞所行道 <small>ニ</small> 於是一切悉具聞 <small>ク</small> 三塗苦難名永閉 <small>テ</small> 但有自然快樂音 <small>ノ</small> 是故其國號安樂 <small>ト</small> 頭面頂禮無極尊</p>	

<p>五十</p> <p>十方三世、无量、惠・ 同乘、一如、一號、正覺。」 二智圓滿、道平等。 攝化、隨緣、故、若于。 我歸、阿彌陀、淨土、 即是歸命、諸佛、國。」</p>	<p>〔冊九〕</p> <p>我從無始、循三界、 爲虛妄、輪所、廻轉。 一念一時、所造業・ 足繫六道、一滯、二塗、 唯願、慈光護念、我、 令我、不失菩提心。 我讚、佛惠、功德者 願聞、十方諸、有緣、 欲得、往生、安樂、一者 普皆如、意、無、障礙。 所有、功德若、大小 廻施、一切、共、往生、 南無不可思議光 一切歸命、稽首、禮。</p>
<p>十方三世、无量、慧 同乘、一如、一號、正覺、 二智圓滿、道平等、 攝化、隨緣、故、若于、 我歸、阿彌陀、淨土、 即是歸命、諸佛、國、</p>	<p>我從、無始、循、三界、 爲、虛妄、輪所、廻轉、 一念一時、所造業、 足繫、六道、一滯、二塗、 唯願、慈光護念、我、 令我、不失、菩提心、 我讚、佛惠、功德音、 普皆如、留意、無、障礙、 所、有、功德若、大小、 廻施、一切、共、往生、 南無不可思議光 一心、歸命、稽首、禮、</p>
<p>十方三世、無量、慧 同乘、一如、一號、正覺、 二智圓滿、道平等、 攝化、隨緣、故、若干、 我歸、阿彌陀、淨土、 即是歸命、諸佛、國、</p>	<p>我從、無始、循、三界、 爲、二虛妄、輪、一、所、廻轉、 一念一時、所、造業、 足繫、二、六道、一、滯、二、塗、 唯願、慈光護念、我、 令我、三、我、不、失、菩提心、 我讚、佛惠、功德音、 願聞、十方、諸、有緣、 欲得、往生、安樂、一者 普皆如、留意、無、障礙、 所有、功德若、大小 廻施、一切、共、往生、 南無不可思議光 一心、歸命、稽首、禮、</p>

<p>五十一</p>	<p>我以一心一讚一佛。 願遍十方無礙人。 如是十方無量佛 咸各至心一頭面禮。」</p>	<p>我以一心一讚一佛。 願遍十方無礙人。 如是十方無量佛 咸各至心一頭面禮。」</p>	<p>我以一心一讚一佛。 願遍十方無礙人。 如是十方無量佛 咸各至心一頭面禮。」</p>
<p>讚阿彌陀佛偈一卷</p>	<p>讚有百九十五行。禮有五十一拜竟。」</p> <p>康和元年十二月一日申時於大原報身房書寫功畢」 同二日移點了 執筆僧藥源」 願依此書寫功自他共生極樂國矣」</p>	<p>讚阿彌陀佛偈一卷 願以書寫力早生彌陀國 一校了 寬元々年後七月廿一日書寫了 釋圓空</p> <p>深草霞谷真宗律院開祖立信上人眞本摹寫即了 天保十五辰四月廿三日 同所 善福寺住僧良實 甲辰六月廿六日講此偈了日良實學人舉贈之 雲華院大含領受 以爲藏本</p>	<p>讚阿彌陀佛偈 讚一百九十五 禮五十一拜</p>

良忍本

- ①上欄に「潮イ」。
- ②上欄に「道イ」。
- ③「或生^テ安樂國^ニ成大利^ヲ」は割書きを誤つて本文に組み込んだものか。

- ④下欄に「次イ」。
- ⑤下欄に「爲イ」。
- ⑥上欄に「意イ」。
- ⑦上欄に「徳」。
- ⑧上欄に「日イ」。
- ⑨「亮」に「リヤウ」の左訓。
- ⑩上欄に「眼イ」。
- ⑪「樂」の下の下欄に「國イ」とあるが、どの字の校異か不明。
- ⑫「放」に「□ツニ」の左訓。
- ⑬上欄に「草イ」。

円空本

- ①内題の前に以下の記述がある。
- 迦才浄土論下巻云法師撰集无量壽經奉讀七言偈百九十五行
并問答一卷流行於世勸道俗等決定往生得見諸佛

五祖傳云續高僧傳云選禮淨土十二偈續龍樹偈後

南无阿彌陀佛二

- 一衆生世間清淨二
- 一佛自現在西方一^一无等々廿八行
- 二菩薩應生自阿彌陀至禮講堂八十三行
- 二器世間清淨一三
- 一地自妙土廣大不可思議尊六行
- 二樹自道場樹至阿彌陀四十一行
- 三水自樓閣殿至无極尊二十行

讚阿彌陀佛偈一卷

曇鸞法師作

南无阿彌陀佛

釋名无量壽傍經奉讀亦曰安養一

- ②「澤」に「マミル\ナタラカナリ」の左訓。
- ③「滅」右に「无イ」。
- ④「艶」に「ウルハシ\イロフ」の左訓。
- ⑤「讚」右に「歎イ」。
- ⑥「恩」に「ウツクシ」の左訓。また右に「因イ」。
- ⑦「感」右に「成イ」。
- ⑧「讚」右に「歎イ」。
- ⑨「超」右に「過イ」。

- ⑩ 「流」に「メクル ナカル」の左訓。
- ⑪ 「通」右に「儀イ」。
- ⑫ 「力」右に「至イ」。
- ⑬ 「如_レ是功德」右に「生_{スレハ}ニ安樂國_ニ「イ」。
- ⑭ 「絶」に「ワタテ」の左訓。
- ⑮ 「絶」右に「名_{クハキコト}「イ」。
- ⑯ 「成」右に「滅イ」。
- ⑰ 「雅」に「ウルハシ」の左訓。
- ⑱ 「導」右に「尊イ」。
- ⑲ 「適」に「カナフ」の左訓。
- ⑳ 「敢」に「アヘテ\カシコマテ」の左訓。
- ㉑ 「後」右に「彼イ」。
- ㉒ 「故_{セハ}」送り仮名の「セ」は「ナレ」の合字か。右に「爲_{ナリ}「イ」。
- ㉓ 下欄に「歎_{クムシテ}「イ」。
- ㉔ 「晏」「安」それぞれ左下に丸（圈発）。
- ㉕ 「号」依拠本では「名_ナ」となっており、左に丸、右に「号」とある。
- ㉖ 「虔」に「ツ、シミ\ウヤマフ」の左訓。
- ㉗ 「入」に「サトルコトヲ」の左訓。
- ㉘ 上欄に「遏イ」。
- ㉙ 「陵」に「ツカ」の左訓。
- ㉚ 「超」右に「照」。
- ㉛ 「嫁」に「タヲヤカナリ\ヤハラカナリ」の右訓。
- ㉜ 「亮」に「サヤケシ\アキラカナリ」の左訓。
- ㉝ 「平」右に「互_ニ」。
- ㉞ 「縷」に「ロウ」の左訓。
- ㉟ 「列」に「ツラナリ」の左訓。
- ㊱ 「芬」に「カウハシ\ニアヒテ」、「芳」に「ニホフ」の左訓。
- ㊲ 上欄に「芬_{カウハシ}芳」。
- ㊳ 「用」に「ルト」の左訓。
- ㊴ 「訖」に「ルトニ」の左訓。
- ㊵ 「朱」に「アカシ」、「紫」に「ムラサキナリ」、「紅」に「クレナイ」、「緑」に「ミトリ」の左訓。
- ㊶ 「焯」に「カ、ヤキ」、「燂」に「ヒカリ」、「煥」に「アキラカ」、「爛」に「テル」の左訓。
- ㊷ 「彫」に「エル」、「綺」に「イロフ」の左訓。
- ㊸ 「明」に「ミヤウ」の左訓。
- ㊹ 「珠」に「シユ」、「璫」に「タウ」の左訓。
- ㊺ 「其」に「池イ」の左訓。

- ④6 「彩」に「ウルハシ／イロフ」の左訓。
- ④7 「熠」に「ヒカリ」、「燿」に「カ、ヤク」の左訓。
- ④8 「澹」に「アラフ」の左訓。
- ④9 「綽」に「ヒロシ／ユタカナリ」、「約」に「マトフ」の左訓。
- ⑤0 上欄に「勸イ」。
- ⑤1 「語」に「ラヒヲ」の左訓。
- ⑤2 「隨」右に「諸イ」。
- ⑤3 下欄に「如イ」。
- ⑤4 「放」に「ユルシテ」の左訓。
- ⑤5 「卉」に「クサ」の左訓。
- ⑤6 行間に「願聞^{シテム}」_下十方諸有緣^ノニ^ニ欲^{スレハ}レ^{ムト}往^レト^{スルコトヲ}生^{スルコトヲ}安樂^ニ者^ニ」。
- ⑤7 上欄に「實智／方便智」。

3 『略論安楽土義』訓点資料三本対照表

凡例

一、本表は以下の三本を対照した。

上段……大原来迎院藏良忍手沢本（康和二年書写。以下、良忍本）

中段……京都常楽寺藏本（室町時代書写といわれる。以下、常楽寺本）

下段……南條神興校正『真宗』校本七祖聖教上』（明治十二年発兌）所収（以下、南條本）

一、適宜改行し、主要な問答ごとに線で区切った。

一、依拠本に使用する古体、異体等の漢字は原則として通用の正体に改めた。また「己」「巳」「巴」の三字、「莊」「庄」の二字、

「比」「此」の二字については文脈によって適宜補正した。

一、「フ、ノ」などの合字は仮名に改めた。菩薩・声聞・菩提などの略字は通常の表記に改めた。依拠本で漢字の連記を示す記号は

「々」に統一した。

一、依拠本で汚損等により不明瞭な箇所は「□」で示した。また依拠本にはない文字で便宜上補ったもの及び推定したものは

「」で示した。

一、依拠本の改行箇所を「」で示した。

一、良忍本については、依拠本では返り点、句切りの記号が点で記されているが、ここでは便宜上それぞれ「一」、「。」で表した。

一、常楽寺本については、依拠本にある訂正や挿入を「」で示した。

一、良忍本、常楽寺本については南條本と漢字の異なる箇所を網掛けで示した。

<p>良忍本（康和二年）</p>	<p>【外題】 安樂土義 良忍之</p>	<p>略論安樂土義」 問曰安樂國於三界中何界所攝。 答曰如釋論言。如斯淨土非三界所攝。何以故無欲故非欲界。地居故非色界。有形色故非無色界。</p>
<p>常樂寺本（室町時代）</p>	<p>【外題】 略論</p>	<p>略論安樂淨土義 曇鸞法師作」 問曰安樂國於三界中何界所攝。 答曰如釋論言。如斯淨土非三界所攝。何以故無欲故非欲界。地居故非色界。有形色故非無色界。</p>
<p>南條本（明治十二年）</p>	<p>略論安樂淨土義 曇鸞法師作」 問曰安樂國於三界中何界所攝。 答曰如釋論言。如斯淨土非三界所攝。何以故無欲故非欲界。地居故非色界。有形色故非無色界。</p>	<p>經曰阿彌陀佛本行菩薩道時作比丘名曰法藏。於世自在王佛所請問諸佛淨土之行。時佛爲說二百一十億諸佛刹土。天人善惡國土精麤悉現與之。于時法藏菩薩即於佛前發弘誓大願取諸佛土。於無量阿僧祇劫如所發願一行諸波羅密。行圓滿成。無上道別業所得非三界也。</p>

問曰安樂國有幾種莊嚴名爲淨土。

答曰若依經一據義一法一藏菩薩卅八願卽是其事。尋讀一可知。不復重序。若依無一量壽論以二種清淨一攝二十九種莊嚴成就。以二種清淨者一。是器世間清淨。二是衆生世間清淨。

器世間清淨有十七種一莊嚴成就。一者國土相勝過。二。三。四。道。二者其國大廣。量如虛空。一無有齊限。

三者從菩薩。正道大慈悲出世。善根所起。

四者清淨。光明圓滿莊嚴。

五者備具。第一珍寶。性一出。奇妙寶物。

六者潔淨。光明常照世間。

七者其國寶物柔軟。觸者適悅。生於勝樂。

問曰安樂國有幾種莊嚴名爲淨土。

答曰若依經一據義一法一藏菩薩卅八願卽是其事。尋讀一可知。不復重序。若依無量壽論以二種清淨一攝二十九種莊嚴成就。以二種清淨者一。是器世間清淨。二是衆生世間清淨。

器世間清淨有二十七種一莊嚴成就。一者國土相勝過。二。三。四。道。二者其國大廣。量如虛空。一無有齊限。

三者從菩薩。正道。慈悲。出世。善根所起。

四者清淨。光明圓滿莊嚴。

五者備具。第一珍寶。性一出。奇妙寶物。

六者潔淨。光明常照世間。

七者其國寶物柔軟。觸者適悅。生於勝樂。

問曰安樂國有幾種莊嚴名爲淨土。

答曰若依經一據義一法一藏菩薩卅八願卽是其事。尋讀一可知。不復重序。若依無量壽論以二種清淨一攝二十九種莊嚴成就。以二種清淨者一。是衆生世間清淨。二是器世間清淨。

器世間清淨有二十七種一莊嚴成就。一者國土相勝過。二。三。四。道。二者其國大廣。量如虛空。一無有齊限。

三者從菩薩。正道大慈。悲出世。善根所起。

四者清淨。光明圓滿莊嚴。

五者備具。第一珍寶。性一出。奇妙寶物。

六者潔淨。光明常照世間。

七者其國寶物柔軟。觸者適悅。生於勝樂。

<p>八者千萬、寶花莊嚴、池沼、寶殿樓閣、種種、寶樹、雜色、光明影納、世界、無量寶羅網覆、虛空、四面懸鈴、常吐法音。</p>	<p>九者於虛空中、自然、常雨天華、天衣、香、莊嚴普勳。</p>	<p>十者佛惠、光明照除、癡闇。</p>	<p>十一者梵聲開悟、遠聞十方。</p>	<p>十二者阿彌陀佛無上法王、善力住持。</p>	<p>十三者從如來淨花之所、化生。</p>	<p>十四者愛樂、佛法、味、禪、三昧、爲食。</p>	<p>十五者永離身心諸苦、受樂、無間。</p>	<p>十六者乃至不聞、二乘女人根缺之名。</p>	<p>十七者衆生有所欲樂、隨心稱意、無不滿足。</p>	<p>如是等十七種是名器世間清淨。</p>
<p>八者千萬、寶華莊嚴、池沼、寶殿、樓閣、種種、寶樹、雜色、光明影、網、世界、無量、寶羅網覆、虛空、四面、懸鈴、常吐法音。</p>	<p>九者於虛空中、自然、常雨天華、天衣、天香、莊嚴普薰。</p>	<p>十者佛慧、光明照、除、癡、闇。</p>	<p>十一者梵聲開悟、遠聞十方。</p>	<p>十二者阿彌陀佛無上法王、善力住持。</p>	<p>十三者從如來淨華之所、化生。</p>	<p>十四者愛樂、佛法、味、禪、三昧、爲食。</p>	<p>十五者永離身心諸苦、受樂、無間。</p>	<p>十六者乃至不聞、二乘女人根缺之名。</p>	<p>十七者衆生有所欲樂、隨心稱意、無不滿足。</p>	<p>如是等十七種是名器世間清淨。</p>
<p>八者千萬、寶花莊嚴、池沼、寶殿、寶樓閣、種種、寶樹、雜色、光明影、納、世界、無量、寶羅網覆、虛空、四面、懸鈴、常吐法音。</p>	<p>九者於虛空中、自然、常雨天華、天衣、天香、莊嚴普薰。</p>	<p>十者佛慧、光明照、除、癡、闇。</p>	<p>十一者梵聲開悟、遠聞十方。</p>	<p>十二者阿彌陀佛無上法王、善力住持。</p>	<p>十三者從如來淨華之所、化生。</p>	<p>十四者愛樂、佛法、味、禪、三昧、爲食。</p>	<p>十五者永離身心諸苦、受樂、無間。</p>	<p>十六者乃至不聞、二乘女人根缺之名。</p>	<p>十七者衆生有所欲樂、隨心稱意、無不滿足。</p>	<p>如是等十七種是名器世間清淨。</p>

衆生世間清淨有十二種莊成就。

一者無量大珍寶王、微妙淨華臺、以爲佛座。

二者無量相好無量光明莊嚴、佛身。

三者佛無量、弁才應機說法。具足清白令人樂聞。々者必悟、解言不虛設。

四者佛、眞如、智慧猶如虛空、照了諸法、物相、別相、心無分別。

五者天人不動、衆廣大莊嚴、譬如須彌山、映顯、四大海、法王、相具足。

六者成就、無上果、尚無能及。況復過者。

七者爲天人丈夫調御師、大衆恭敬圍遶、如師子王、師子圍遶。

衆生世間清淨有十二種莊嚴成就。

一者無量、大珍寶王微妙、華臺、以爲佛座。

二者無量、相好無量、光明莊嚴、佛身。

三者佛、無量、辨才應機說法、具足清白、令人樂聞。々者必悟、解言不虛設。

四者佛、眞如、智慧猶如虛空、照了諸法、總持別相、心無分別。

五者天人不動、衆廣大莊嚴、譬如須彌山、映顯、四大海、法王、相具足。

六者成就、無上果、尚無能及、況復過者。

七者爲天人丈夫調御師、大衆恭敬圍遶、如師子王、師子圍遶。

衆生世間清淨有十二種莊嚴成就。

一者無量、大珍寶微妙、華臺、以爲佛座。

二者無量、相好無量、光明莊嚴、佛身。

三者佛、無量、辯才應機說法、具足清白、令人樂聞。々者必悟、解言不虛設。

四者佛、眞如、智慧猶如虛空、照了諸法、總持別相、心無分別。

五者天人不動、衆廣大莊嚴、譬如須彌山、映顯、四大海、法王、相具足。

六者成就、無上果、尚無能及、況復過者。

七者爲天人丈夫調御師、大衆恭敬圍遶、如師子王、師子圍遶。

八者佛本願力莊嚴持住諸功德遇者無空過。能令速滿足一切功德海與諸淨心菩薩畢竟得證平等法身。淨心菩薩與上地菩薩畢竟同得寂滅平等。

九者安樂國諸菩薩衆身不動搖而遍至十方一種々應化。如實修行常作佛事。

十者如是菩薩應化身一切時不前後一心一念放大光明悉能遍至十方世界教化衆生種々方便修行所成滅除一切衆生苦惱。

十一者如是等菩薩於一切世界無余照諸佛大會無余廣大無量供養恭敬讚嘆諸佛如來功德。

十二者是諸菩薩於十方一切世界無三寶處住持莊嚴佛法僧寶功德大海遍示令解如實修行。

八者佛本願莊嚴住持諸功德遇者無空過能令速滿足一切功德海與諸淨心菩薩畢竟得證平等法身與淨心菩薩與上地菩薩畢竟同得寂滅平等。

九者安樂國諸菩薩衆身不動搖而遍至十方種々應化如實修行常作佛事。

十者如是菩薩應化身一切時不前後一心一念放大光明悉能遍至十方世界教化衆生種々方便修行所成滅除一切衆生苦惱。

十一者是等菩薩於一切世界無餘照諸佛大會無餘廣大無量供養恭敬讚嘆諸佛如來功德。

十二者是諸菩薩於十方世界無三寶處住持莊嚴佛法僧寶功德大海遍示令解如實修行。

八者佛本願力莊嚴住持諸功德遇者無空過能令速滿足一切功德海未證淨心菩薩畢竟得證平等法身與淨心菩薩與上地菩薩畢竟同得寂滅平等。

九者安樂國諸菩薩衆身不動搖而遍至十方一種々應化如實修行常作佛事。

十者如是菩薩應化身一切時不前後一心一念放大光明悉能遍至十方世界教化衆生種々方便修行所成滅除一切衆生苦惱。

十一者是等菩薩於一切世界無餘照諸佛大會無餘廣大無量供養恭敬讚嘆諸佛如來功德。

十二者是諸菩薩於十方一切世界無三寶處住持莊嚴佛法僧寶功德大海遍示令解如實修行。

如是等法王、八種、莊嚴功德成就。如是等、四種莊嚴功、德成就。是名衆生世間清淨。安樂國土、具如是等二十九種、莊嚴功德成就。故名淨土。

問曰生安樂土者凡有幾種。輩々有幾因緣。

答無量壽經中、唯有三輩上中下。無量壽觀經中、一品中、又分爲上中下三々、而九。合爲九品。今依一、傍、無、量壽經、爲讚。且據此經、作三品、論之。

- 上輩生者有五因緣。
- 一者捨家離欲、而作沙門。
- 二者發無上菩提心。
- 三者一向專念無量壽佛。
- 四者修諸功德。
- 五者願生安樂國。

如、是、等、法、王、八、種、莊、嚴、功、德、成、就。如、是、等、菩、薩、四、種、莊、嚴、功、德、成、就。是、名、衆、生、世、間、清、淨、一、安、樂、國、土。具、如、是、等、廿、九、種、莊、嚴、功、德、成、就。故、名、淨、土。

問曰生安樂土者凡有幾種。輩々觀經中有幾因緣。

答曰無量壽經中、唯有三輩上中下。無量壽觀經中、一品、又分爲上中下三々、而九。合爲九品。今依一、傍、無量壽經、爲讚。且據此經、作三品、論之。

- 上輩生者有五因緣。
- 一者捨家離欲、而作沙門。
- 二者發無上菩提心。
- 三者一向專念無量壽佛。
- 四者修諸。
- 五者願生安樂國。

如、是、等、法、王、八、種、莊、嚴、功、德、成、就。如、是、等、菩、薩、四、種、莊、嚴、功、德、成、就。是、名、衆、生、世、間、清、淨、一、安、樂、國、土。具、如、是、等、廿、九、種、莊、嚴、功、德、成、就。故、名、淨、土。

問曰生安樂土者凡有幾輩。有幾因緣。

答曰無量壽經中、唯有三輩上中下。無量壽觀經中、一品、又分爲上中下三三、而九。合爲九品。今依一、傍、無量壽經、爲讚。且據此經、作三品、論之。

- 上輩生者有五因緣。
- 一者捨家離欲、而作沙門。
- 二者發無上菩提心。
- 三者一向專念無量壽佛。
- 四者修諸功德。
- 五者願生安樂國。

具此五緣、臨命終時、無量壽佛與諸大衆、現其人前、即便隨佛往生安樂。於七寶華中、自然化生。住不退轉、智慧勇猛、神通自在。

中輩生者有七因緣。

一者發無量菩提心。

二者一向專念無量壽佛。

三者少多修善奉持齋戒。

四者起立塔像。

五者飯食沙門。

六者懸繪燃燈散花燒香。

七者以此迴向願生安樂。

臨命終時、無量壽佛化現其身、光明相好、如眞佛、與諸大衆現其人前、即便隨化佛往生安樂。住不退轉、功德智慧次如上輩。

下輩生者有三因緣。

具此五緣、臨命終時、無量壽佛與諸大衆、現其人前、即便隨佛往生安樂。於七寶華中、自然化生、住不退轉、智慧勇猛、神通自在。

中輩生者有七因緣。

一者發無上菩提心。

二者一向專念無量壽佛。

三者多少修善奉持齋戒。

四者起立塔像。

五者飯食沙門。

六者懸繪燃燈散華燒香。

七者以此迴向願生安樂。

臨命終時、無量壽佛化現其身、光明相好、如眞佛、與諸大衆現其人前、即便隨化佛往生安樂。住不退轉、功德智慧次如上輩。

下輩生者有三因緣。

具此五緣、臨命終時、無量壽佛與諸大衆、現其人前、即便隨佛往生安樂。於七寶華中、自然化生、住不退轉、智慧勇猛、神通自在。

中輩生者有七因緣。

一者發無上菩提心。

二者一向專念無量壽佛。

三者多少修善奉持齋戒。

四者起立塔像。

五者飯食沙門。

六者懸繪燃燈散華燒香。

七者以此迴向願生安樂。

臨命終時、無量壽佛化現其身、光明相好、如眞佛、與諸大衆現其人前、即便隨化佛往生安樂。住不退轉、功德智慧次如上輩。

下輩生者有三因緣。

一者假使不能作諸功德。當發無上菩提心。
二者一向專意乃至十念々無量壽佛

三者以至誠心願生安樂。

臨命終時夢見無量壽佛亦得往生功德。智慧如此中輩。

又有一種往生安樂不入三輩中。謂以疑惑心修諸功德願生安樂。不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本願生安樂。生安樂國七寶宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天亦皆自然於五百歲不見佛不聞經法不見菩薩聲聞聖衆安樂國土謂之邊地亦自胎生。

一者假使不能作諸功德當發无上菩提心
二者一向專意乃至十念々無量壽佛

三者以至誠心願生安樂

臨命終時夢見無量壽佛亦得往生功德智慧次如中輩

又有一種往生安樂不入三輩中謂以疑惑心修諸功德願生安樂不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本願生安樂生安樂國七寶宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天亦皆自然於五百歲不見佛不聞經法不見菩薩聲聞聖衆安樂國土謂之邊地亦曰胎生

一者假使不能作諸功德當發无上菩提心
二者一向專意乃至十念々無量壽佛
三者以至誠心願生安樂

臨命終時夢見無量壽佛亦得往生功德智慧次如中輩

又有一種往生安樂不入三輩中謂以疑惑心修諸功德願生安樂不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本生安樂國七寶宮殿或百由旬各於其中受諸快樂如切利天亦皆自然於五百歲中常見佛不聞經法不見菩薩聲聞聖衆安樂國土謂之邊地亦曰胎生

邊地」者言^{イフコト}其五百歲中^ニ不見聞三寶^一義^一同^一邊地之難^一。或亦於安樂國土^一最在其邊。胎生者譬如胎生人^一初生之時^一人法未成^一邊言其難^一胎言其闇。此二名^一皆借此^一況彼^一耳。非是八難^一中^一邊地^一。亦非胞胎^一中^一胎生^一。何以知之^一。安樂國一向^一化生^一故。々々知^一非實^一胎生^一五百年後^一還得^一見聞三寶^一故。々々知^一非八難^一中^一邊地^一。」

問曰彼胎生者處^一七寶^一宮殿^一中^一受快樂^一不復何所^一憶念^一。

答曰經^一喻^一云譬如轉輪王^一々々子^一得罪^一於王^一内^一於後宮^一繫^一以金鎖^一。一切^一供^一具無^一所乏^一猶如王子^一。々々于時^一雖有好妙^一種々^一自娛樂^一具^一心^一不愛樂^一。但念^一設諸^一方便^一求免^一怖出^一。

邊地^{ト云ハ}者言^ク其五百歲^ノ中^ニ不見聞三寶^一義^一同^一邊地者言其五百歲中不見聞三寶一義同邊地者言其五百歲中不見聞三寶一義同邊地之難一或亦於安樂國土一最在其邊一胎生者譬如胎生人初生之時人法未成邊言其難胎言其闇此一此二名皆借此況彼耳非是八難中邊地一亦非胞胎中胎生一何以知之安樂國一向化生故々々知非實胎生五百年後還得一見聞三寶一故々々知非八難中邊地一也

問曰彼胎生者處^一七寶^一宮殿^一中^一受快樂^一不復何所^一憶念^一。

答曰經^一喻^一云譬如轉輪王^一子^一得罪^一於王^一内^一於後宮^一繫^一以金鎖^一。一切^一供具^一無所^一乏少^一猶如^一王子^一于^一時雖^一有^一好妙^一種々^一自娛樂^一具^一心^一不愛樂^一但念^一設諸^一方便^一求免^一怖出^一。

邊地」者言^ク其五百歲^ノ中^ニ不見聞三寶^一義^一同^一邊地之難^一或亦於安樂國土^一最在其邊^一胎生者譬如胎生人初生之時人法未成^一邊言其難^一胎言其闇^一此一此二名皆借此^一況彼耳^一非是八難^一中^一邊地^一亦非^一胞胎^一中^一胎生^一何以知之^一安樂國一向^一化生^一故^一故知^一非實^一胎生^一五百年後^一還得^一見聞^一三寶^一故^一故知^一非八難^一中^一邊地^一也

問曰彼胎生者處^一七寶^一宮殿^一中^一受快樂^一不復何所^一憶念^一。

答曰經^一喻^一云譬如轉輪王^一子^一得罪^一於王^一内^一於後宮^一繫^一以金鎖^一。一切^一供具^一無所^一乏少^一猶如^一王子^一于^一時雖^一有^一好妙^一種々^一自娛樂^一具^一心^一不愛樂^一但念^一設諸^一方便^一求免^一怖出^一。

彼胎生者亦復如是。雖處七寶宮殿。有妙色聲香味觸。不以爲樂。但見不見三寶。一不^レ得供養。一修諸善。本以之爲苦。若識其本罪。深自悔憤。求^レ離。彼處^一即得如意。還同三輩生者。當是五百年。未方識罪。悔^一耳。」

問曰以疑惑心一往生安樂一名曰胎生者云何起疑。
答曰經中但云「疑惑」不信不出所以疑。一意尋^レ不^レ了。五句一敢以對治一言之。不^レ了佛智^一者。謂不能信了佛一切種智。不^レ了故起疑。此一句物斥所疑。下四句一々對治所疑。々有四意。

彼胎生者亦復如是。雖處七寶宮殿。有妙色聲香味觸。不以爲樂。但見不見三寶。一不^レ得供養。一修諸善。本以之爲苦。若識其本罪。深自悔憤。求^レ離。彼處^一即得如意。還同三輩生者。當是五百年。未方方識罪。悔^一耳。

問曰以疑惑心一往生安樂一名曰胎生者云何起疑。
答曰經中但云「疑惑」不信不出所以疑。一意尋^レ不^レ了。五句一敢以對治一言之。不^レ了佛智^一者。謂不能信了佛一切種智。不^レ了故起疑。此一句總辨所疑。下四句一々對治所疑。疑有四意。

彼胎生者亦復如是。雖處七寶宮殿。有妙色聲香味觸。不以爲樂。但見不見三寶。一不^レ得供養。一修諸善。本以之爲苦。若識其本罪。深自悔憤。求^レ離。彼處^一即得如意。還同三輩生者。當是五百年。未方方識罪。悔^一耳。

問曰以疑惑心一往生安樂一名曰胎生者云何起疑。
答曰經中但云「疑惑」不信不出所以疑。一意尋^レ不^レ了。五句一敢以對治一言之。不^レ了佛智^一者。謂不能信了佛一切種智。不^レ了故起疑。此一句總辨所疑。下四句一々對治所疑。疑有四意。

一者疑、但憶念、阿彌陀佛、不必得往。生、安樂。何以故。經言。業道如稱。重者先牽。云何一生或百年或十年或一日無惡。不造。以十念相續。便得往生。即入正定聚。畢竟不退。與三塗諸苦永隔耶。若爾先牽之義。何以取信。又曠劫已來。備造諸行有漏之法。繫屬三界。云何不。斷三界結惑。直以少時念。阿彌陀佛。便出三界耶。繫業之義復欲云何。

對治。此疑。一故言不思議智。不思議者謂佛智。力能以少作多。以多作少。以近為遠。以遠為近。以輕為重。以重為輕。以長為短。以短為長。如是等佛智無量無邊不可思議。

一者疑、但憶念、阿彌陀佛、不必得往。生、安樂。何以故。經言。業道如稱。重者先牽。云何一生或百年或十年或一月無惡。不造。以十念相續。便得往生。即入正定聚。畢竟不退。與三塗諸苦永隔。耶若爾先牽之義。何以取信。又曠劫已來。備造諸行有漏之法。繫屬三界。云何不。斷三界結惑。直以少時念。阿彌陀佛。便出三界耶。繫業之義復欲云何。

對治。此疑。一故言不思議智。不思議者謂佛智。力能以少作多。以多作少。以近為遠。以遠為近。以輕為重。以重為輕。以長為短。以短為長。如是等佛智無量無邊不可思議。

一者疑、但憶念、阿彌陀佛、不必得往。生、安樂。何以故。經言。業道如稱。重者先牽。云何一生或百年或十年或一月無惡。不造。以十念相續。便得往生。即入正定聚。畢竟不退。與三塗諸苦永隔。乎若爾先牽之義。何以取信。又曠劫已來。備造諸行有漏之法。繫屬三界。云何不。斷三界結惑。直以少時念。阿彌陀佛。便出三界耶。繫業之義復欲云何。

對治。此疑。一故言不思議智。不思議者謂佛智。力能以少作多。以多作少。以近為遠。以遠為近。以輕為重。以重為輕。以長為短。以短為長。如是等佛智無量無邊不可思議。

譬如百夫^ノ百年^ニ聚薪^一積^ツ高千刃^ノ豆許^ノ火焚^ニ半日^ニ便盡^カ。豈可^ヤ得^ル言^フ百年^ノ之薪半日^ニ不盡^ニ耶[。]

又如^モ覽者^ノ寄載^テ他船^ニ因帆^ニ風勢^ニ一日^ニ至^ク千里^ニ。豈可得^ル言^フ覽者^ノ云何^ニ一日^ニ至^ク千里^ニ耶[。]

又如下^ノ賤貧人^ノ獲^テ一端^ノ物^ヲ而以^テ貢^ム王^ニ。々慶^テ所得^ル加^テ諸重賞^ヲ。斯須^ノ之頃^ニ富貴盈溢^ニ豈可^レ得^ル以^テ數十年^ノ仕^ニ備^ニ盡^ニ辛勲^ヲ不^レ達^ル歸^ル者^ノ言^フ彼富貴無^ク此事^ニ耶[。]

又如^シ劣夫^ノ以^テ己身力^ヲ擲^キ驢^ニ不^レ上^リ從^テ轉^ル輪王^ノ行^ニ便乘^リ虚空^ニ飛^ビ騰^リ自在^ニ。後^ニ可^レ以^テ擲^キ驢^ノ之劣言^ヲ轉^リ輪王^ノ行^ニ必^ズ不^レ能^ク乘^ル空^ニ耶[。]

又如^シ一十圍之索^ヲ千夫^ノ不^レ制^シ童子^ノ揮^テ劍^ヲ瞬^ク頃^ニ兩分^ニ豈可得^ル言^フ一小兒^ノ力^ヲ不^レ能^ク斷^ル索^ニ耶[。]

譬如^ハ三百夫^ノ百^ノ年^ニ聚^メ薪^ヲ積^ム高千刃^ノ豆^ノ許^ノ火^ヲ焚^キ半日^ニ便^チ盡^ル豈^カ可^ク得^ル言^フ二百年^ノ之^ノ積^ミ半日^ニ不^レ盡^ル耶[。]

又如^シ覽者^ノ寄^リ載^ル他^ノ船^ニ因^テ風帆^ノ勢^ニ一^ニ日^ニ至^ク二千里^ニ豈^カ可^ク得^ル言^フ三覽者^ノ云何^ニ一^ニ日^ニ至^ク二千里^ニ耶[。]

又如下^ノ賤貧人^ノ獲^テ瑞物^ヲ一^ニ以^テ貢^ム王^ニ王慶^テ所^レ得^ル加^テ諸^ノ重賞^ヲ。斯須^ノ之頃^ニ富貴^ニ盈溢^ニ豈^カ可^ク得^ル以^テ數十年^ノ仕^ニ備^ニ盡^ニ辛勲^ヲ不^レ達^ル歸^ル者^ノ言^フ下^ニ彼富貴無^ク此事^ニ上^リ耶[。]

又如^シ劣夫^ノ以^テ己身力^ヲ擲^キ驢^ニ不^レ上^リ從^テ轉^ル輪王^ノ行^ニ便^チ乘^リ虚空^ニ飛^ビ騰^リ自在^ニ。後^ニ可^レ以^テ擲^キ驢^ノ之劣夫^ノ言^ヲ必^ズ不^レ能^ク乘^ル空^ニ上^リ耶[。]

又如^シ一十圍之^ノ索^ヲ千夫^ノ不^レ制^シ童子^ノ揮^テ劍^ヲ瞬^ク頃^ニ兩分^ニ豈^カ可^ク得^ル言^フ一小兒^ノ力^ヲ不^レ能^ク斷^ル索^ニ耶[。]

譬如^ハ百夫^ノ百^ノ年^ニ聚^メ薪^ヲ積^ム高千刃^ノ豆^ノ許^ノ火^ヲ焚^キ半日^ニ便^チ盡^ル豈^カ可^ク得^ル言^フ二百年^ノ之^ノ薪^ヲ積^ミ半日^ニ不^レ盡^ル乎[。]

又如^シ下^ノ覽者^ノ寄^リ載^ル他^ノ船^ニ因^テ風帆^ノ勢^ニ一^ニ日^ニ至^ク二千里^ニ豈^カ可^ク得^ル言^フ下^ノ覽者^ノ云何^ニ一^ニ日^ニ至^ク二千里^ニ上^リ乎[。]

又如下^ノ賤貧人^ノ獲^テ瑞物^ヲ一^ニ以^テ貢^ム主^ニ主慶^テ所^レ得^ル加^テ諸^ノ重賞^ヲ。斯須^ノ之頃^ニ富貴^ニ盈溢^ニ豈^カ可^ク得^ル以^テ數十年^ノ仕^ニ備^ニ盡^ニ辛勲^ヲ不^レ達^ル歸^ル者^ノ言^フ上^ニ彼富貴無^ク此事^ニ乎[。]

又如^シ劣夫^ノ以^テ己身力^ヲ擲^キ驢^ニ不^レ上^リ從^テ轉^ル輪王^ノ行^ニ便^チ乘^リ虚空^ニ飛^ビ騰^リ自然^ニ復^リ可^ク乘^ル擲^キ驢^ノ之劣夫^ノ言^ヲ必^ズ不^レ能^ク乘^ル空^ニ上^リ耶[。]

又如^シ一十圍之^ノ索^ヲ千夫^ノ不^レ制^シ童子^ノ揮^テ劍^ヲ瞬^ク頃^ニ兩分^ニ豈^カ可^ク得^ル言^フ一小兒^ノ力^ヲ不^レ能^ク斷^ル索^ニ乎[。]

又如^⑩鳩鳥入水一魚蚌斯斃^⑪犀角觸泥^⑫死者咸起。豈可得言性命一斷無可生耶。

又如黃鵠呼子安々々一還^⑬活^⑭豈可得言墳下千歲決無甦^⑮可耶。

一切^⑯萬法皆有自力他^⑰力自攝他攝千開万閉無量無邊。安^⑱得^⑲以^⑳有礙之識^㉑一疑^㉒無礙之法^㉓一乎^㉔。又五不思議^㉕中佛^㉖〔法〕最不可思議^㉗而以百年之惡^㉘一爲^㉙重疑^㉚十念々佛^㉛爲^㉜輕^㉝不得往生^㉞安樂^㉟一入^㊱正定聚^㊲一者^㊳是事不然^㊴。

二者疑^㊵佛智^㊶於人^㊷不爲玄絶^㊸。何以故夫一切名字從相待^㊹一^㊺生^㊻。覺^㊼智從不覺^㊽一^㊾生^㊿。如迷方從[㋀]記方[㋁]一[㋂]生[㋃]。若使迷[㋄]絶[㋅]不迷[㋆]々々卒[㋇]不解[㋈]。迷若可[㋉]解[㋊]一[㋋]必迷者解[㋌]。亦可云解者迷[㋍]。々々解[㋎]々々迷[㋏]。猶[㋐]乎反覆[㋑]耳。乃可明昧[㋒]爲異[㋓]。亦安得超[㋔]然哉。起此疑[㋕]一故於佛智慧[㋖]一[㋗]生[㋘]疑[㋙]不信[㋚]。

又如^⑫鳩鳥入水一魚蚌斯斃^⑬犀角觸泥^⑭死者咸起。豈可得言性命一斷無可生耶。

又如黃鵠呼子安^⑮一還^⑯活^⑰豈可得言墳下千歲決無^⑱甦^⑲可耶。

一切^㉑萬法皆有自力他力自攝他攝千開万閉無量無邊。安^㉒得^㉓以^㉔有礙之識^㉕一疑^㉖無礙之法^㉗一乎^㉘。又五不思議^㉙中佛^㉚〔法〕最不可思議^㉛而以百年之惡^㉜一爲^㉝重疑^㉞十念々佛^㉟爲^㊱輕^㊲不得往生^㊳安樂^㊴一入^㊵正定聚^㊶一者^㊷是事不然^㊸。

二者疑^㊹佛智^㊺於人^㊻不爲玄絶^㊼。何以故夫一切名字從^㊽相待^㊾一^㊿生[㋀]。覺[㋁]智從不覺[㋂]一[㋃]生[㋄]。如迷[㋅]方從[㋆]起方[㋇]一[㋈]生[㋉]。若使迷[㋊]絶[㋋]不迷[㋌]々々卒[㋍]不解[㋎]。迷若可[㋏]解[㋐]一[㋑]必迷者解[㋒]。亦可云解者迷[㋓]。々々解[㋔]々々迷[㋕]。猶[㋖]乎反覆[㋗]耳。乃可[㋘]明昧[㋙]爲[㋚]異[㋛]。亦安得[㋜]超[㋝]然[㋞]。起此疑[㋟]一故於佛智慧[㋠]一[㋡]生[㋢]疑[㋣]不信[㋤]。

又如^⑫鳩鳥入水一魚蚌斯斃^⑬犀角觸泥^⑭死者咸起。豈可得言性命一斷無可生乎。

又如黃鵠呼子安^⑮一還^⑯活^⑰豈可得言墳下千歲決無^⑱甦^⑲乎。

一切^㉑萬法皆有自力他力自攝他攝千開万閉無量無邊。安^㉒得^㉓以^㉔有礙之識^㉕一疑^㉖無礙之法^㉗一乎^㉘。又五不思議^㉙中佛^㉚〔法〕最不可思議^㉛而以百年之惡^㉜一爲^㉝重疑^㉞十念々佛^㉟爲^㊱輕^㊲不得往生^㊳安樂^㊴一入^㊵正定聚^㊶一者^㊷是事不然^㊸。

二者疑^㊹佛智^㊺於人^㊻不爲玄絶^㊼。何以故夫一切名字從^㊽相待^㊾一^㊿生[㋀]。覺[㋁]智從不覺[㋂]一[㋃]生[㋄]。如迷[㋅]方從[㋆]起方[㋇]一[㋈]生[㋉]。若使迷[㋊]絶[㋋]不迷[㋌]々々卒[㋍]不解[㋎]。迷若可[㋏]解[㋐]一[㋑]必迷者解[㋒]。亦可云解者迷[㋓]。々々解[㋔]々々迷[㋕]。猶[㋖]乎反覆[㋗]耳。乃可[㋘]明昧[㋙]爲[㋚]異[㋛]。亦安得[㋜]超[㋝]然[㋞]。起此疑[㋟]一故於佛智慧[㋠]一[㋡]生[㋢]疑[㋣]不信[㋤]。

對治此「疑」故言不可稱智。不可稱智者言「佛智」絶於稱謂。非相形待。何以言之。法若是有必有之。智。法若是無亦應有。無之。智。諸法離於有無。故佛冥諸法。則智絶。相待。汝引解迷爲一喻。猶是一迷耳。不成迷解。亦如夢中與他解夢。雖云解夢。非是不夢以知取佛。不曰知佛。以不知取佛。亦非知佛。以非知非。不知取佛。亦非知佛。以非々知非々。不知取佛。亦非知佛。々々智離。此四句。緣之者心行減指之一言者語斷。

對治此「疑」故言不可稱智。不可稱智者言「佛智」絶於稱謂。非相形待。何以言之。法若是有必有之。智。法若是無亦應有。無之。智。諸法離於有無。故佛冥諸法。則智絶。相待。汝引解迷爲一喻。猶是一迷耳。不成迷解。亦如夢中與他解夢。雖云解夢。非是不夢以知取佛。不曰知佛。以不知取佛。亦非知佛。以非知非。不知取佛。亦非知佛。以非々知非々。不知取佛。亦非知佛。々々智離。此四句。緣之者心行減指レ之者言語斷。

對治此「疑」故言不可稱智。不可稱智者言「佛智」絶於稱謂。非相形待。何以言之。法若是有必有之。智。法若是無亦應有。無之。智。諸法離於有無。故佛冥諸法。則智絶。相待。汝引解迷爲一喻。猶是一迷耳。不成迷解。亦如夢中與他解夢。雖云解夢。非是不夢以知取佛。不曰知佛。以不知取佛。亦非知佛。以非知非。不知取佛。亦非知佛。以非々知非々。不知取佛。亦非知佛。々々智離。此四句。緣之者心行減損レ之者言語斷。

以是義一故釋論言若一人見般若一是則爲被縛。若不見般若一是亦爲被縛。若人見般若一是則爲解脫。若不見般若一是亦爲解脫。此偈中說一不離四句一者爲縛。離四句一者爲解。汝疑佛智與人一不玄絶一者是事不然。

三者疑佛不能實度一切衆生。何以故過去世有無量阿僧祇恆沙諸佛。現在十方世界亦有無量無邊阿僧祇恆沙諸佛。若使佛實能度一切衆生一者則無久無復三界。第二佛則不應復爲衆生一發菩提心一具淨修土一攝受衆生一而實有第二佛一攝受衆生一乃至實有三世十方無量諸佛攝受衆生一故知佛實不能度一切衆生。起此疑一故於阿彌陀一作有量想。

以是義一故釋論言若一人見般若一衆般若一是則爲被縛。若不見般若一是亦爲被縛。若人見般若一是則爲解脫。若不見般若一是亦爲解脫。此偈中說一不離四句一者爲縛。離四句一者爲解。汝疑佛智與人一不玄絶一者是事不然。

三者疑佛不能實度一切衆生。何以故過去世有無量阿僧祇恆沙諸佛。現在十方世界亦有無量無邊阿僧祇恆沙諸佛。若使佛實能度一切衆生一者則不應復爲衆生一發菩提心一具淨修土一攝受衆生一而實有第二佛攝受衆生一乃至實有三世十方無量諸佛攝受衆生一故知佛實不能度一切衆生。起此疑一故於阿彌陀佛一作有量想。

以是義一故釋論云若一人見般若一是則爲被縛。若不見般若一是亦爲被縛。若人見般若一是則爲解脫。若不見般若一是亦爲解脫。此偈中說一不離四句一者爲縛。離四句一者爲解。汝疑佛智與人一不玄絶一者是事不然。

三者疑佛不能實度一切衆生。何以故過去世有無量阿僧祇恆沙諸佛。現在十方世界亦有無量無邊阿僧祇恆沙諸佛。若使佛實能度一切衆生一者則不應復爲衆生一發菩提心一具淨修土一攝受衆生一而實有第二佛攝受衆生一乃至實有三世十方無量諸佛攝受衆生一故知佛實不能度一切衆生。起此疑一故於阿彌陀佛一作有量想。

對治一此疑一故言大乘廣智。大乘廣智者言一佛無法不知無煩惱不斷無不善不備無衆生不度。所以有三世十方佛者有五義。

一者若一使無一第二佛乃至無量阿僧祇恆沙諸佛一者佛便不能度一切衆生。以實能度一切衆生一故則有十方無量諸佛。々々即是前佛所一度衆生。

二者若一佛度一切衆生一盡者後亦不應復有佛。何以故無覺一他義一故復依何義一。說有三世佛耶。依覺一他義一故一說佛々皆能度一切衆生。三者佛後能度猶是前佛之能。何以故一由前佛一有後佛一故。譬如帝王之曹得相紹襲一後一王即是前王之能故。

對一治此疑一故言大乘廣智一大々々者言佛無二法不知無三煩惱不斷無四不善不備無五衆生不度所以有三千十方佛一者有三五義一

一者若使無一第二佛乃至無一阿僧祇恆沙諸佛一者佛便不能度一切衆生一以實能度一切衆生一故則有十方無量諸佛一衆生

二者若一佛度一切衆生一盡者後亦不應復有佛一何以故無一覺他義一故復依一何義一說一有二三佛一耶依一覺他義一故說一佛々皆度一切衆生一

對治此疑一故言大乘廣智一者言無二法不知無三煩惱不斷無四不善不備無五衆生不度所以有三世十方一者有三五義一

一者若使無一第二佛乃至無一阿僧祇恆沙諸佛一者佛便不能度一切衆生一以實能度一切衆生一故則有十方無量諸佛一衆生

二者若一佛度一切衆生一盡者後亦不應復有佛一何以故無一覺他義一故復依一何義一說一有二三佛一乎依一覺他義一故說一佛佛皆度一切衆生一

三者佛後能度猶是前佛之能何以故一由一前佛一有後佛一故譬如帝王之曹得相紹襲一後王即是前王之能故

四者佛力雖能度一切衆生。要須有因緣。若衆生與前佛無因緣。須後佛。如是一無緣衆生動。徑。百千萬佛不聞不見。非佛力劣也。譬如日月。周四天下。一破諸闇。暝而盲者不見。非日不明也。雷震裂耳。而聾者不聞。非聲不厲也。覺諸緣理。一。之。曰佛。若情強違。緣理。非正。覺也。是衆生無量。佛亦無量。徵佛。莫問。有緣無緣。何。不盡度一切衆生。一者。非理言也。

「四者佛力雖能度一切衆生。要須有因緣。若衆生與前佛無緣。須後佛。如是一無緣衆生動。徑。百千萬佛不聞不見。非佛力劣也。譬如日月。周四天下。一破諸闇。暝而盲者不見。非日不明也。雷震裂耳。而聾者不聞。非聲不厲也。覺諸緣理。一。之。曰佛。若情強違。緣理。非正。覺也。是衆生無量。佛亦無量。徵佛。莫問。有緣無緣。何。不盡度一切衆生。一者。非理言也。」

「四者佛力雖能度一切衆生。要須有因緣。若衆生與前佛無緣。須後佛。如是一無緣衆生動。徑。百千萬佛不聞不見。非佛力劣也。譬如日月。周四天下。一破諸闇。暝而盲者不見。非日不明也。雷震裂耳。而聾者不聞。非聲不厲也。覺諸緣理。一。之。曰佛。若情強違。緣理。非正。覺也。是衆生無量。佛亦無量。徵佛。莫問。有緣無緣。何。不盡度一切衆生。一者。非理言也。」

答曰世間非有邊二非無邊。亦絶四句。佛令衆生「離」此四句一名之爲度。其實非度。不非度。非盡非不盡。譬如「夢渡」大海「值」濤波「諸難」其人畏怖「叫聲」徹外。有外人「喚覺」。但然無憂。但爲「渡夢」不爲渡河。

問曰言渡與不渡二皆墮邊見。何以但說「渡」一切衆生一爲大乘廣智不說「度衆」生一爲大乘廣智一耶。

答曰衆生「莫不厭苦」一求樂。畏縛一求「解」聞「渡」則歸向。聞「不渡」不知。所以「不渡」。便謂「佛非大慈」悲一則不歸向。不歸向「故長寢久夢」無由可息。爲是人「故多說渡」不說「不渡」。復次諸法無行經「亦言佛不得佛」道。亦不度衆生。凡夫強「分別」作佛「度」衆生。言度衆生「是對治」悉旦。言不度衆生「是第一悉檀」。二言各有所以。不相違背。

答曰世間非有邊二非無邊。亦絶四句。佛令衆生「離」此四句一名之爲度。其實非度。不非度。非盡非不盡。譬如「夢渡」大海「值」濤波「諸難」其人畏怖「叫聲」徹外。但「爲渡」夢不爲「渡河」。問曰言「渡」與「不渡」皆墮「邊見」一何以「但說」渡「一切衆生」一爲「大乘廣智」上「不說」不「渡衆」生一爲「大乘廣智」上耶。

答曰衆生「莫不厭苦」一求樂。畏縛一求「解」聞「渡」則歸向。聞「不渡」不知。所以「不渡」。便謂「佛非大慈」悲一則不歸向。不歸向「故長寢久夢」無由可息。爲是人「故多說渡」不說「不渡」。復次諸法無行經「亦言佛不得佛」道。亦不度衆生。凡夫強「分別」作佛「度」衆生。言度衆生「是對治」悉檀。言不度衆生「是第一悉檀」。二言各有所以。不相違背。

答曰衆生「莫不厭苦」一求樂。畏縛一求「解」聞「渡」則歸向。聞「不渡」不知。所以「不渡」。便謂「佛非大慈」悲一則不歸向。不歸向「故長寢久夢」無由可息。爲是人「故多說渡」不說「不渡」。復次諸法無行經「亦言佛不得佛」道。亦不度衆生。凡夫強「分別」作佛「度」衆生。言度衆生「是對治」悉檀。言不度衆生「是第一悉檀」。二言各有所以。不相違背。

答曰世間非有邊二非無邊。亦絶四句。佛令衆生「離」此四句一名之爲度。其實非度。不非度。非盡非不盡。譬如「夢渡」大海「值」濤波「諸難」其人畏怖「叫聲」徹外。但「爲渡」夢不爲「渡河」。問曰言「渡」與「不渡」皆墮「邊見」一何以「但說」渡「一切衆生」一爲「大乘廣智」上「不說」不「渡衆」生一爲「大乘廣智」上耶。

答曰衆生「莫不厭苦」一求樂。畏縛一求「解」聞「渡」則歸向。聞「不渡」不知。所以「不渡」。便謂「佛非大慈」悲一則不歸向。不歸向「故長寢久夢」無由可息。爲是人「故多說渡」不說「不渡」。復次諸法無行經「亦言佛不得佛」道。亦不度衆生。凡夫強「分別」作佛「度」衆生。言度衆生「是對治」悉檀。言不度衆生「是第一悉檀」。二言各有所以。不相違背。

答曰衆生「莫不厭苦」一求樂。畏縛一求「解」聞「渡」則歸向。聞「不渡」不知。所以「不渡」。便謂「佛非大慈」悲一則不歸向。不歸向「故長寢久夢」無由可息。爲是人「故多說渡」不說「不渡」。復次諸法無行經「亦言佛不得佛」道。亦不度衆生。凡夫強「分別」作佛「度」衆生。言度衆生「是對治」悉檀。言不度衆生「是第一悉檀」。二言各有所以。不相違背。

問曰如夢得息豈不是度耶。若一
度二耶若一切衆生所夢皆息。世
間豈不盡耶
答曰說夢爲世間。若夢息則無夢
者若無夢者亦不說度者。如是知世
間卽是出世間。雖度無量衆生
則不墮顛倒。

四者疑佛。不得一切種智。何以故
若能遍知諸法。一々々隨有邊。故。若
不能遍知則非一切種智。故
對治此疑。故言無等無倫最上勝智。
無等無倫最上勝智者凡夫智。虛妄
佛智如實。虛實玄殊。理無
得等。故言無等。

聲聞辟支佛欲有所知入定。方知
出定。又知亦有限。佛得如實三昧。
常在深定而遍照。方法。二與
無二深淺。非倫。故言無倫。

問曰如夢得息豈不是度耶。若一
度二耶若一切衆生所夢皆息。世
間豈不盡耶
答曰說夢爲世間。若夢息則無夢
者若無夢者亦不說度者。如是知世
間卽是出世間。雖度無量衆生則
不墮顛倒。
四者疑佛。佛不得一切種智。何
以故若能遍知諸法。一々々隨
有邊。故。若不能遍知則非一切種
智。故對治此疑。故言無等無倫最
上勝智。無等無倫最上勝智者。凡
夫智。虛妄。佛智。如實。虛實。玄
殊。理無得等。故言無等。
聲聞辟支佛欲有所知入定。方知
出定。又知亦有限。佛得如實三
昧。常在深定而遍照。方法。二與
無二深淺。非倫。故言無倫。

問曰如夢得息豈不是度耶。若一
度二耶若一切衆生所夢皆息。
世間豈不盡
答曰說夢爲世間。若夢息則無夢
者若無夢者亦不說度者。如是知世
間卽是出世間。雖度無量衆生則
不墮顛倒。
四者疑佛。佛不得一切種智。何
以故若能遍知諸法。一々々隨
有邊。故。若不能遍知則非一切種
智。故對治此疑。故言無等無倫最
上勝智。無等無倫最上勝智者。凡
夫智。虛妄。佛智。如實。虛實。玄
殊。理無得等。故言無等。
聲聞辟支佛欲有所知入定。方知
出定。又知亦有限。佛得如實三
昧。常在深定而遍照。方法。二與
無二深淺。非倫。故言無倫。

八地已上、菩薩雖得報生三昧、用無出入、而習氣微動、三昧不極、明淨。形待佛智、猶爲有上。佛智斷、具足。如法而照。法無量。故照亦無量。譬如函大、蓋亦大。

此三句亦可展轉相成。以佛智無與等者、一故所以無倫。以無一偏、故最上勝。亦可最上勝、故無等、無等之、故無倫。但言「無等」便足。復何以須、下三句一者如須陀洹智、不與阿羅漢等、而是其類。初地至十地亦如是。智雖不等、非不其倫。何以故、非最上、故汝以知有邊無邊爲難、疑佛非一切智、一者是事不然。

問曰下輩生中云十念相續、便得往生云、何名爲十念相續。

八地已上、菩薩雖得報生三昧、用無出入、而習氣微動、三昧不極、明淨。一形一持、佛智、猶爲有上。佛智斷具足。如法而照。法量。故照亦無量。譬如函大、蓋亦大。此三句亦可展轉相成、以佛智無與等者、一故所以無倫。以無一偏、故最上勝。故無等、無等、故無倫。但言「無等」便足。復何以須、下三句一者、如須陀洹智、雖不非不其倫、何以故、非最上、不與阿羅漢等、而是其類。初地至十地亦如是。智雖不等、故汝以知有邊無邊爲難、疑佛非一切智、一者是事不然。

問曰下輩生中云十念相續、便得往生云、何名爲十念相續。

八地已上、菩薩雖得報生三昧、用無出入、而習氣微動、三昧不極、明淨。一形待佛智、猶爲有上。佛智斷具足。如法而照。法無量。故照亦無量。譬如函大、蓋亦大。一故言「最上」。此三句亦可展轉相成、以佛智無與等者、一故所以無倫。以無一偏、故最上勝。亦可最上勝、故無等、無等、故無倫。但言「無等」便足。復何以須、下三句一者、如須陀洹智、不與阿羅漢等、而是其類。初地至十地亦如是。智雖不非不其倫、何以故、非最上、故汝以知有邊無邊爲難、疑佛非一切智、一者是事不然。

問曰下輩生中云三十念相續、便得往生云、何名爲三十念相續。

答曰譬如有奮人空曠迫處一值遇怨賊一拔奮勇一直來。欲取其人一勁走規一渡一河。若得渡一河一首領可全爾時但念渡河一方便我至河岸爲着衣一渡一爲脱衣一渡。若着衣一納一恐不得過。若脱衣一納一恐無得暇。但一有此念一更無他緣。一念何當渡河。卽是一念如是十念一不雜餘心一名爲十念相續。

行者亦爾。念阿彌陀佛一如彼一念渡一至于十念。若念佛名字一若念佛相好一若念佛光明一若一念佛神力一若念佛功德一若念佛智慧一若念佛本願一一无他心間雜一心々相次一乃至十念一名爲十念相續。

答曰譬^ハ如^シ下有^テ人空曠^ノ廻^{ナル}處^{ニシテ}值^ニ遇^ス怨賊^ト一拔^レ刀奮^テ勇直^ニ來^ル一欲^ス殺^ス其^ノ人^ヲ一勁^ツ走^テ規^ヲ渡^ル一河^ヲ一若^シ得^ル渡^ル河^ヲ一首領^ヲ可^レ全^ク爾時^ニ但^シ念^フ渡^ル河^ヲ一方便^ニ我^レ至^ル河^ノ岸^ニ爲^シ着^テ衣^ヲ一渡^ル一爲^シ脱^キ衣^ヲ一渡^ル一若^シ着^テ衣^ヲ一納^ム一恐^ハ不^レ得^ル過^ス若^シ脱^キ衣^ヲ一納^ム一恐^ハ無^ク得^ル暇^ヲ但^シ一有此^ノ念^ヲ一更^ニ無^ク他緣^ト一何^レ當^レ渡^ル河^ヲ卽^チ是^レ一十念^ト一不^レ雜^ス餘心^ヲ一各^ノ名^ヲ爲^ス十念相續^ト一

行^ノ者^モ亦^モ爾^{ナリ}念^ス阿彌陀佛^ヲ一如^ク彼^ノ念^フ渡^ル河^ヲ一若^シ念^フ佛名字^ヲ一若^シ念^フ佛相好^ヲ一若^シ念^フ佛光明^ヲ一若^シ念^フ佛神力^ヲ一若^シ念^フ佛功德^ヲ一若^シ念^フ佛智慧^ヲ一若^シ念^フ佛本願^ヲ一无^ク他心^ヲ間雜^ス一心々相次^ト一乃至^テ十念^ト一各^ノ名^ヲ爲^ス十念相續^ト一

答曰譬^ハ如^シ下有^テ人空曠^ノ廻^{ナル}處^{ニシテ}值^ニ遇^ス怨賊^ト一拔^レ刀奮^テ勇直^ニ來^ル一欲^ス殺^ス其^ノ人^ヲ一勁^ツ走^テ規^ヲ渡^ル一河^ヲ一若^シ得^ル渡^ル河^ヲ一首領^ヲ可^レ全^ク爾時^ニ但^シ念^フ渡^ル河^ヲ一方便^ニ我^レ至^ル河^ノ岸^ニ爲^シ着^テ衣^ヲ一渡^ル一爲^シ脱^キ衣^ヲ一渡^ル一若^シ着^テ衣^ヲ一納^ム一恐^ハ不^レ得^ル過^ス若^シ脱^キ衣^ヲ一納^ム一恐^ハ無^ク得^ル暇^ヲ但^シ一有此^ノ念^ヲ一更^ニ無^ク他緣^ト一何^レ當^レ渡^ル河^ヲ卽^チ是^レ一十念^ト一不^レ雜^ス餘心^ヲ一各^ノ名^ヲ爲^ス十念相續^ト一

行^ノ者^モ亦^モ爾^{ナリ}念^ス阿彌陀佛^ヲ一如^ク彼^ノ念^フ渡^ル河^ヲ一若^シ念^フ佛名字^ヲ一若^シ念^フ佛相好^ヲ一若^シ念^フ佛光明^ヲ一若^シ念^フ佛神力^ヲ一若^シ念^フ佛功德^ヲ一若^シ念^フ佛智慧^ヲ一若^シ念^フ佛本願^ヲ一无^ク他心^ヲ間雜^ス一心々相次^ト一乃至^テ十念^ト一各^ノ名^ヲ爲^ス十念相續^ト一

一往言「十念相續似若不難。然凡夫心猶野馬。識劇彌猴。」馳騁六塵。无暫停息。宜及信心預自剋念。使積習成。性善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王。人積善行。死无惡念。如樹西傾。倒必隨典。若一使刀風一至。百苦湊身。習不在懷。念何可弁。又宜同志。五三共結言要。垂命時迭相開曉。爲稱阿彌陀佛名号。願生安樂。聲々相次。使成十念也。譬如臙印。々泥印懷文成。此命斷。時即是生安樂。時一入正定聚。更何所憂也。」

略論安樂土義

康和二年二月四日未時敬書寫了
同月六日巳時於大原草菴移點了
桑門藥源
自他法界同利益共生極樂成佛道

一往言「十念相續似若不難。然凡夫心猶野馬。識劇彌猴。」馳騁六塵。无暫停息。宜及信心預自剋念。使積習成。性善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王。人積善行。死无惡念。如樹西傾。倒必隨典。若一使刀風一至。百苦湊身。習不在懷。念何可弁。又宜同志。五三共結言要。垂命時迭相開曉。爲稱阿彌陀佛名号。願生安樂。聲々相次。使成十念也。譬如臙印。々泥印懷文成。此命斷。時即是生安樂。時一入正定聚。更何所憂也。」

一往言「十念相續似若不難。然凡夫心猶野馬。識劇彌猴。」馳騁六塵。无暫停息。宜及信心預自剋念。使積習成。性善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王。人積善行。死无惡念。如樹西傾。倒必隨典。若一使刀風一至。百苦湊身。習不在懷。念何可弁。又宜同志。五三共結言要。垂命時迭相開曉。爲稱阿彌陀佛名号。願生安樂。聲々相次。使成十念也。譬如臙印。々泥印懷文成。此命斷。時即是生安樂。時一入正定聚。更何所憂也。」

右此一卷者六道衆生之骨目出能三界
麟麒麟教也亦聖人之財自毫也
常樂寺什物

良忍本

- ① 「白」依拠本では「淨」となっており、左側に点、右側に「白」とある。
- ② 「無」と「分」の間に点、その右に「所イ」。
- ③ 「傍」左に「ソフ」。
- ④ 「量」右に丸。
- ⑤ 「快」↓「イ+夫」か？
- ⑥ 「況」左に「タクラフ」。
- ⑦ 「未」右に「或□（末）か」。
- ⑧ 「斥」右に「或□（弁）か」イ、左に「サス」。
- ⑨ 「轉輪王行」四字それぞれ左に丸。
- ⑩ 「鳩」右上に丸。左に「チム毒鳥也」。
- ⑪ 「性」右上に丸。
- ⑫ 「言」右に「ノ」？墨付きか。
- ⑬ 「玄」↓「云」か？
- ⑭ 「旦」右上に墨付き。
- ⑮ 「之」↓繰り返し返し記号（々）か？
- ⑯ 「復」依拠本では「後」、左に丸、右に「復」。
- ⑰ 「白」右に「白刃イ本」左に丸。
- ⑱ 「間」左下に墨付き。

常楽寺本

- ① 依拠本には「田」の左に点。右に「日」とある。
- ② 「世」の下に丸。「間」は上欄に有り。
- ③ 「聞」の下に丸。「間」は上欄に有り。
- ④ 「觀經中」三字それぞれ左に傍線と丸。
- ⑤ 「離」の右に丸。その下に「棄」。
- ⑥ 「生」は上欄に有り、その上下に丸。（⑥の位置は「南條本」他異本に依る。）
- ⑦ 「同」右に「コノ字アリ」。以下【】内の部分は線で囲い、上下に丸があるが、読むなという指示か。
- ⑧ 「何一」は薄れている。消そうとした跡か。
- ⑨ 「疑」の下に丸。以下「此一句總辨所疑」下四句、一一對治所疑疑は上欄に有り、その上下に丸。
- ⑩ 「爲」を線で消し右に「以」と修正。
- ⑪ 「貢」に「タテマツル」の左訓。
- ⑫ 「驢」に「ウサキムマ」の左訓。
- ⑬ 上欄に「鳩鳥」。
- ⑭ 「反」に「アヲノキ」？の左訓。
- ⑮ 「亦」の下に丸。以下「非知佛」は上欄に有り。

- ⑬ 「備」に「ハラ」の左訓。
- ⑭ 「襲」に「カサヌ」の左訓。
- ⑮ 「徴」に「ハタス」の左訓。
- ⑯ 「智」の下に丸。そこから次の【】部の上下の丸へ線が引かれている。
- ⑰ 「首」に「クヒコロモノ」、「領」に「クヒ」の左訓。
- ⑱ 上欄に「稱」。

南條本

- ① 「覽者」に「アシナヘタルモノ」の左訓。
- ② 「主主」に「ワウワウ」の左訓。
- ③ 「斯須」に「シハラク」の左訓。
- ④ 「勁走」に「イソキハシリ」の左訓。

